

2003年度  
講義計画

桃山学院大学

講 義 計 画

藝術設計の  
素描の基礎

美術大講義部

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
中国語Ⅱ a 中国語Ⅱ b	0 4 0 4	通 期 通 期	2 単位 2 単位	か 何 イ 為
<b>[講義概要・学習目標]</b> 一年の時に習ったものを復習しながら、新しく出現する文法事項、表現文型を学び、より高度な会話力と読解力を身につけることが目標。実際練習を中心に適宜文法等の説明を加える。	<b>[講義計画]</b> 原則的に半期はテキストの半分まで進み、一年間で一冊を修了する。			
<b>[成績評価の方法]</b> 試験の成績と平常点で総合評価する。	<b>[参考文献]</b> 「中国語辞書」 白帝社			
<b>[教科書]</b> 「話す中国語 北京編2」 董燕、遠藤光暁著 朝日出版社				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
朝鮮語Ⅱ a		通期	2 単位	徳 成 外志子
<b>[講義概要・学習目標]</b> 朝鮮語初級修了者を対象に、テキストに沿って、より上の段階の文法、文型の学習を系統的に進めつつ、実用会話や旅行会話を中心に修得する。 この授業では、特に、会話能力を高めることに重点を置きたい。ビデオや録音テープを使って聞き取り能力を養い、授業はできるだけ朝鮮語で対話を行いながら進め、簡単な日常会話ができるようにもしたい。テキスト本文は、短い実用会話で毎課完結しているので、最終的にはテキスト本文を暗唱する。 余裕があれば、併せて、簡単な朝鮮語の読み物、民話、童話から、韓国の歌、新聞雑誌などまで多様な文章を副教材として取り上げ、読書能力も高めると同時に、韓国の生活や風俗、文化の一端が理解できるようにしたい。また、朝鮮語で自己紹介をしたり、学んだ語彙や文法の範囲で自由な作文を行い、朝鮮語で考え、朝鮮語で自己の意思を表現する基礎的練習を行う。 授業は基本的に韓国で使われている言葉を中心に学び、朝鮮民主主義人民共和国で韓国と異なって使われている部分は、適宜補注していきたい。	<b>[講義計画]</b> 前期：1. テキストの1課から、初級の発音、文法の復習をかねて行い、12課あたりまで進む。 3. 簡単な副教材プリントや歌、ビデオなど。 4. 初歩的な作文と会話。 後期：1. テキスト13課から24課まで。 2. やや高度な内容の副教材プリントや歌、ビデオなど。 3. 作文や実用会話。			
<b>[成績評価の方法]</b> 毎課行う小テストと学年末に行うテストの比重が最も高い(60%)が、それに出席(30%)や普段の課題への取り組み(10%)を総合的に評価する。語学は特に、出席と普段の授業の予習・復習が大切である。	<b>[参考文献]</b> 辞書等は授業で説明する。			
<b>[教科書]</b> ・木内明・佐野良一『今すぐ話せる朝鮮語(応用編)』株式会社ナガセ、1999				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
朝鮮語Ⅱ b		通 期	2 単位	青 野 正 明
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>「朝鮮語Ⅰ b」で学んだ基礎力をもとに、さらに文法をしっかりと学びながら、徐々に難しい文章の翻訳ができるように進めていく。</p> <p>この時期は、ある程度の基礎的な文法がわかっているため、高度な文法や文章表現の理解も容易であろう。</p> <p>1年を終えた段階では、辞書を引きながら新聞記事や簡単な論説文を翻訳することができるだろう。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>春学期：第11～17課</p> <p>秋学期：第18～25課</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席状況、受講態度、期末試験を総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p> <p>金東漢・張銀英『韓国語レッスン 初級Ⅱ』 スリーエーネットワーク、2001年</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
インドネシア語Ⅱ a		通 期	2 単位	深 見 純 生
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>いわゆる講読を中心とする授業を行う。目標としては、辞書の助けを借りつつ自力であまり難しくない文章を読めるようになることを目指す。</p> <p>講読のテキストに出てくる文例、文型を展開させた作文や会話にも配慮する。</p> <p>あわせてインドネシア語を通してインドネシアの社会や文化への理解が深まるよう願っている。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 辞書の引き方、とくに接辞の処理。</li> <li>2. 接辞の機能。</li> <li>3. 講読。その展開としての作文と会話。</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>平常点および期末テスト</p>	<p>[参考文献]</p> <p>教室で指示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>教室で指示する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
インドネシア語Ⅱ b		通 期	2 単位	北野 正徳
[講義概要・学習目標] 二年目のインドネシア語の学習で、この授業では、主に実用的な練習に力を入れてゆきたい。具体的には、昨年度の教科書を継続して使用し、これまで学んできた主な項目（知識）を、できるだけ実際に使えるように練習してゆきたい。特に、簡単な作文が書けるだけでなく、実際に話せたり・聞き取れるように練習したい。そのためには、地味な作業であるが、授業中の時間も使って、良く使う基本単語や構文の暗記・暗誦などの練習も行いたい。この意味で、知識の習得に重点が置かれた昨年よりも、授業中の練習は量的にも内容的にも増加すると思われる。もっとも、授業の進行においては、大量の予習や宿題を課さず、できるだけ毎回の授業中で一定の効果があるように務めてゆきたい。	[講義計画] 大まかな流れとして、教科書の構成に従って、これまで学んできた重要な項目を復習・練習してゆく。そこでは、できるだけ実際の発話や会話の状況に合うようなかたちで練習を行いたい。とりわけ、基本単語（主な名詞・形容詞・動詞など）を覚えて実際に使ってゆけるように、授業中の時間も使ってできるだけ練習してゆきたい。			
[成績評価の方法] 昨年度同様に出席、授業参加の姿勢、各期末のまとめ練習などの総合評価。できるだけ継続して出席して、授業中の練習に積極的に参加することを最も重視する。	[参考文献]			
[教科書] 舟田京子『やさしい初歩のインドネシア語』（南雲堂） （同じ教科書を継続して使います）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語Ⅱ a		通 期	2 単位	藤 原 健
[講義概要・学習目標] 大学に入って1年以上経ち、留学生として日本語の実力不足を自分たち自身がいちばん痛感しているのではないだろうか。 日本語の能力が不十分のまま大学に入り、その後、日本語の能力は伸びず、むしろ専門の科目の勉強などに忙しく、日本語そのものの勉強まで手が回らなくなっているのが現状ではないかと思う。 この授業では、まず、昨年度の教材『はじめての専門書』の残りの課を使用して、大学で使用される専門書の文体に慣れるための読解の練習をし、並行して聞き取り教材『インタビューで学ぶ日本語』を使用して、普通の日本人の日本語を聞き取る練習をする。これは、他の聞き取り用のようにわざわざ録音されたものではなく、ネイティブの日本人にインタビューしたそのままの録音教材である。	[講義計画] <聴解練習> (1)インタビューのテープを聞く ・会話の大意をつかむ ・シートの問いに従い、聞き直す ・設問に答える ・ストラテジーなどについて考える ・スクリプトを見ながら再度聞く (2)会話の内容について話し合う  *読解練習については昨年度の講義概要を参照のこと。			
[成績評価の方法] 出席を重視し(年授業回数 $\frac{3}{2}$ 以上が必要)、評価は進度に応じて年ごとの平常試験(4回程度)で行う。 詳しくは、授業初めに説明する。	[参考文献] 堀歌子・三井豊子・森松映子(共著)『インタビューで学ぶ日本語』(凡人社)  山本一枝・田山のり子・坂本恵(共著)『はじめての専門書』(凡人社)			
[教科書]				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語Ⅱb		通 期	2 単位	吉 岡 美 穂
<b>〔講義概要・学習目標〕</b>  <p>このクラスでは、読解を中心に行い、内容を文章で要約する練習を行う。異文化理解をより深く理解し、自分の意見を発表し、ディスカッションに積極的に参加できるように取り組む。</p>	<b>〔講義計画〕</b>  <p>異文化理解の文献を中心に読解し、それに関する質問に答え、クラスで発表する。小さいグループに分けて意見交換する。</p>			
<b>〔成績評価の方法〕</b>  <p>・出席・テスト・課題・レポート・授業への参加度、態度。</p>	<b>〔参考文献〕</b>  <p>日本語ⅠⅡb          ・「異文化理解とコミュニケーションⅠ・Ⅱ」本名信行（三修社）           ・辞書を必ず持参すること。</p>			
<b>〔教科書〕</b>  <p>資料は教員が準備する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語Ⅴ（上級）	01	通期	2単位	大原 始子 (OHARA, Motoko)
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>This one-year course will introduce the students to the concept that became known as 'New Englishes' in the new cultural contexts. The emergence of English as a global phenomenon – either as a first, second or foreign language – has recently inspired the idea that we should talk not of English, but of many Englishes, especially in Asian and African countries where the use of English is no longer part of colonial legacy. Why do people choose English in education, the press, broadcasting and international communication? What kind of features does each new English have grammatically, lexically and phonetically? These are new and hot discussions we shall explore in this class. Class format will include lectures and comprehension questions. Students will study and understand the diversity of English varieties by reading sociolinguistic papers or writing reports. Relax and speak an Asian English in the class to share your ideas and opinions.</p>	<p>[講義計画]</p> <p>&lt;First Semester&gt; English as an official language and Lingua Franca The UK, Canada, Australia, Hong Kong, The Philippines, Singapore, India, Kenya, Tanzania, Cameroon</p> <p>&lt;Second Semester&gt; English in educational system and business scene. The US, Singapore, Malaysia, China, Taiwan, Japan, Korea, Indonesia, Thailand, South Africa, Namibia, Uganda</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>Evaluation will be based on homework completion, class participation, a written report and performance on the final written exam.</p>	<p>[参考文献]</p> <p>Handouts will be provided by the instructor.</p>			
<p>[教科書]</p> <p>English Communication for International Understanding (Eichosha)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語Ⅴ（上級）	02	春学期集中	2単位	リン ー ダグラス L y n n e Douglas
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>This course will focus on traveling, studying and living abroad in an English-speaking country, (for example Australia). Cultural comparisons, factual information, lifestyle, educational system and daily living will be studied (from newspapers, CD's, and video). Students will work in groups on course topics. Active participation in class, some homework, and oral and written presentations are required. The course requires a high level of English to be developed by all students during the course.</p>	<p>[講義計画]</p> <p>At the beginning of the course, we will focus on experiences of travel, and living in an English-speaking culture and society. Later in the course, students will work in small groups, to prepare a presentation on their own topic, from the course. This presentation will include a video presentation.</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>The course will be graded using continuous assessment. The assessment will include attendance, participation in class, homework, and performance in all classwork tasks.</p>	<p>[参考文献]</p> <p>その都度指示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>プリントを授業時に配布する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語 V (上級)	03	通 期	2 単位	マーレン ハリソン Marl e n Harr i son
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>English V – Living and Studying Abroad</p> <p>This course will prepare you for study and conversation in English-speaking countries. We will practice all aspects of studying abroad including learning how to complete applications and resumes, interviews and admissions essays, and graduate entrance exams. We will also practice study skills and everyday conversation, learn about living and working in foreign cultures, and examine English-language computer programs and internet sites to help you with research and learning.</p> <p>This class is intended for students who are planning on studying abroad in an English-speaking country for graduate or language studies. Students are expected to attend all classes and complete all assignments. Students will not use Japanese in the classroom and will be expected to work together to create meaningful and enjoyable conversation.</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>Using the internet and regular mail, you will choose a study abroad program that interests you and gather all relevant information. You will create a portfolio of documents that you will need for your application - such as resume and personal essay. You will practice graduate entrance exams such as GRE/GMAT and TOEIC/TOEFL. You will also practice interviewing to help you feel more comfortable and relaxed when speaking to professors and students at foreign schools.</p> <p>To aid your conversation abilities and knowledge of foreign culture, you will research current events (that interest you) in English-speaking countries and be prepared to discuss them each week in conversation groups.</p> <p>At the end of this course you will feel more confident about applying to and participating in study abroad programs; have an increased knowledge of foreign culture related to your personal interests; have stronger communication skills; and be able to use both internet and computer technology in English.</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>Students will be evaluated based upon participation in weekly conversation groups, completion of all assignments, attendance, and effort. There will be no written exams in this course.</p>	<p><b>[参考文献]</b></p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>There will be no text for this course. The teacher will provide all necessary information. However, you will purchase two English language magazines at a bookstore of your choice.</p>				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教職概論	01 02	春 学 期 秋 学 期	2 単 位 2 単 位	林 陸 雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>1997年の教育職員養成審議会答申を受けて教育職員免許法が改訂された。その改訂ポイントは、教科に関する科目を半減させ、それに替えて教職に関する科目の重視、とくに生徒指導力の向上と教職の使命感の高揚に力点が置かれたことだ。</p> <p>それを受けて、この科目も必修科目として新設されたのである。求められていることは、教職の使命感についての自覚と、教職への志向と一体感の形成・強化である。昨今の青少年が示す様々な教育問題の背景に、教員の在り方が種々取りざたされている。さらにこの困難な状況を克服するためにも、教員の在り方に対する厳しい目が注がれている。</p> <p>子どもの成長を援助し、子どもの成長をもって自己の喜びとする仕事が教職である。そのための基本的な思想・感性・知識・技能を修得していくためのガイドラインとして、この科目が位置づけられている。履修する以上、教職に就くという強い目的意識をもって受講してほしい。</p> <p>可能な限り、視聴覚教材を使用し、参加型・体験型の授業形態をとる予定である。主体的な受講を期待している。各種の学校を訪問し、参観、補助活動も課外に課す予定である。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現代社会における教師の現状 1</li> <li>2. 現代社会における教師の現状 2</li> <li>3. 戦前の教員養成 1</li> <li>4. 戦前の教員養成 2</li> <li>5. 戦後の教員養成 1</li> <li>6. 戦後の教員養成 2</li> <li>7. 中学校の教諭生活の実際 1</li> <li>8. 中学校の教諭生活の実際 2</li> <li>9. 高等学校の教諭生活の実際 1</li> <li>10. 高等学校の教諭生活の実際 2</li> <li>11. 教師像の類型 1</li> <li>12. 教師像の類型 2</li> <li>13. 教師教育の課題 1</li> <li>14. 教師教育の課題 2</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>毎回の小レポート、期末考査の結果を総合して行う。 ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>授業中に、適宜紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>山崎秀則 西村正登 編著 『求められる教師像と教員養成』 ミネルヴァ書房</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育学概論	01 02	春 学 期 秋 学 期	2 単 位 2 単 位	竹 中 暉 雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>「教育職員免許法施行規則」で規定されている「教育の基礎理論」のうち、教育の理念並びに教育に関する歴史および思想を内容とする。</p> <p>これまで学校教育だけで12年間以上も教育を受けてきながら、いざ「教育とは何か」と改めて問われると極めて答えにくいものである。教育について考えるためには、人間について考えることから始めなくてはならない。なぜ人間だけ長期にわたる教育が必要なのか、そしてまたなぜそのことが可能なのだろうか。このような疑問に答えるためには、いま急速な発展を遂げつつある脳科学の助けが不可欠となる。</p> <p>その次に出てくるのは「ではどのような人間をつくるのか」という教育理念の問題である。教育の理念は時代とともに、社会とともに変化する。ルネッサンス以降における代表的な教育論者の見解について概観していくが、そのさいにおいても重要なことは、それらの諸見解と時代背景との関係である。</p> <p>教育学の学習において留意しておいてほしいことは、いわゆる決まりきった「正解」というものは存在しないということである。神秘性に満ちた人間についての学問なので、仕方のないことである。講義内容および各自が独自に仕入れた知識を比較検討して、自分自身の教育論を持つようにしてほしい。質問・意見は質問票ないしE-mail (takenaka@andrew.ac.jp) で受けつけます。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>教育の本質</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 教育の一般的定義とその問題点</li> <li>2 人間の教育必要性</li> <li>3 人間の脳と教育 その1</li> <li>4 人間の脳と教育 その2</li> <li>5 人間の脳と教育 その3</li> <li>6 教育上の人間関係</li> </ol> <p>教育理念の思想史</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7 近代教育の原理「合自然」</li> <li>8 ルソーによる「子どもの発見」</li> <li>9 「合自然」の流れと反「合自然」</li> <li>10 児童中心主義とデューイ教育学</li> <li>11 連続の教育と非連続の教育</li> <li>12 まとめ</li> <li>13 試験</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>論述試験による。コメントカードは参考として使用。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>竹中・中山・宮野・徳永『時代と向き合う教育学』ナカニシヤ出版、2003年改訂版</p>			
<p>[教科書]</p> <p>使用しない。毎回、プリントを講義開始前に配布する（遅刻者には終了後）。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育心理学	01 02	春学期 秋学期	2単位 2単位	冷水啓子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年、学校では、不登校やいじめに加え、授業中私語に興じて教師の話を聞かない、無断で立ち歩いたりふざけ合ったりして授業に集中できない、我慢ができず些細なことですぐに切れる、といった児童・生徒の行動傾向が問題視されている。では、このように日常的に起こりうる困難な事態に対し、教師はどのように対処すればよいであろうか。適切に対応するためには、子どもの発達の様相や一般的な教授・学習方法に精通しているうえに、さまざまな発達障害や問題行動への臨床援助に関する基礎的知識・理解やセンスをも併せもつ必要がある。すなわち、平常の授業を円滑に運営するだけでなく、問題の発生を未然に防いだり、起こった問題の原因を究明して解決へ導いたりするための知識・理解や技能、柔軟な判断能力や態度が必要とされるのである。</p> <p>そこで、この「教育心理学」では、生涯発達の観点から「幼児、児童・生徒の心身の発達および学習の過程」に関する基礎的理論と教育実践について学び、実践的指導力を身につけるための基礎作りを目指す。</p> <p>なお、これは、教育職員免許法により規定されている「教職に関する科目」の一つとして、本学教職課程では必修とされている随意科目である。授業に関連する補足資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などにより適宜提供する。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 生涯発達と発達理論</li> <li>3. 乳幼児期の発達</li> <li>4. 発達障害とその臨床援助</li> <li>5. 児童期・思春期の発達</li> <li>6. 児童期・思春期の心理障害と臨床援助</li> <li>7. 学校臨床</li> <li>8. 青年期の発達</li> <li>9. 青年期の心理障害と臨床援助</li> <li>10. 全体のまとめ</li> </ol> <p>[但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある]</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席を重視する（原則として 1/3 以上の欠席は認めない）。学期中、必要に応じてレポート提出を求める。学期末には論述試験を実施する。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>藤永保（著）『幼児教育を考える』（岩波新書） 井上健治（著）『子どもの発達と環境』（東京大学出版会） 三浦香苗 他（編）『教員養成のためのテキストシリーズ2 発達と学習の支援』（新曜社） 大村彰道（編）『教育心理学Ⅰ—発達と学習指導の心理学—』（東京大学出版会） 高橋恵子・波多野諠余夫（共著）『生涯発達の心理学』（岩波新書）</p>			
<p>[教科書]</p> <p>下山晴彦（編）『教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学—』（東京大学出版会）</p>	他			

<E・SW・B・L・LE・LI・J生対象>

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育社会学		通 期	4単位	山内乾史
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>本講義は、教育の世界で起きる諸問題を社会学的視点から捉えていく方法について検討することを目的とします。教育は自己完結的な閉じたシステムではなく、政治・経済他の社会システムと密接な関わりを持つシステムであり、それ故に教育の世界だけを見つめるのではなく、巨視的な分析方法が必要とされます。本講義では、欧米との比較（特にアメリカ合衆国とイギリス）を通じて、また明治維新以降の流れを歴史的に振り返ることを通じて、現代日本の教育に起きる諸問題を解説していきます。</p> <p>講義は多人数になることが予想されるので、OHPやビデオによる資料提示が多くなることと思います。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 教育社会学とは何か：日英米を比較検討していく基本的枠組みについて</li> <li>3. 日本における学歴社会論（1）～（3）</li> <li>4. アメリカ合衆国の教育史（1）～（3）</li> <li>5. イギリスの教育史（1）～（3）</li> <li>6. 日本における学力低下問題と改革（1）～（3）</li> <li>7. アメリカ合衆国における学力低下問題と改革（1）～（3）</li> <li>8. イギリスにおける学力低下問題と改革（1）～（3）</li> <li>9. 日本における大学改革と教育機会の変化（1）～（2）</li> <li>10. アメリカ合衆国における教育機会とマイノリティ（1）～（2）</li> <li>11. イギリスにおける大学改革（1）～（2）</li> <li>12. まとめ：日英米の教育問題と教育改革</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>成績評価は試験（75%）と授業終了時に課すレポート（25%）によります。具体的な方法については講義の時に指示します。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>原清治・山内乾史『学力低下（仮題）』ミネルヴァ書房、2003年</p>			
<p>[教科書]</p> <p>原清治・山内乾史・杉本均編『比較教育社会学入門』学文社、2003年</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育法規		春学期	2 単位	金子 勉
<b>【講義概要・学習目標】</b> 元来、教育は私事であり、国家の関与を前提とするものではなかった。しかし、近代公教育制度の成立以後は、学校教育の重要性が明白となり、国家的な関心が高まった。 そのような国家と教育の関係は、教育法規によって規律される。それは、憲法や法律のほか、各種の命令から成り立ち、きわめて複雑な体系を形成している。そこで、この講義では、教育法規のなかから、特に重要なものを取り上げ、その内容と解釈について、講説する。 なお、最近では、社会の急激な変化に対応するために、教育法規が頻りに改正されたり、あるいは今後の改正が構想されている。それらは重要な論点を含んでいるので、「今、教育に何が起きているのか」を問いながら、生きた教育法規の理解を目標として、授業を行う。		<b>【講義計画】</b> 1 教育法規の基本事項 2 憲法の教育条項 3 教育基本法 4 学校制度に関する法規 5 教育条件に関する法規 6 教育内容に関する法規（1） 7 教育内容に関する法規（2） 8 教育行政組織に関する法規 9 私立学校に関する法律 10 教育公務員に関する法律 11 教育職員の免許に関する法律		
<b>【成績評価の方法】</b>  レポートにより評価する。		<b>【参考文献】</b> 解説教育六法編修委員会『解説教育六法』三省堂 菱村幸彦『やさしい教育法の読み方』教育開発研究所 鈴木勲『逐条学校教育法』学陽書房 木田宏『逐条解説地方教育行政の組織及び運営に関する法律』第一法規		
<b>【教科書】</b>  使用しない。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・地歴科教育法	01	通期	4 単位	野尻 亘
<b>【講義概要・学習目標】</b> 学校教育現場では、いじめ・不登校・校内暴力・非行・差別などの諸問題に苦悩している。このような状況の中で、中学「社会科」・高校「地理歴史科」の教育や授業は、どのようにあるべきか。 単に知識や技能の伝達に留まらず、新しい学力観をふまえた上で、人権教育・平和教育・環境教育・開発教育・国際理解教育といったテーマについて、地理歴史教育の再構築を目指すこととする。  この授業は中学校社会科・高校地理歴史科教員免許取得の必修科目です。そのため模擬授業や討論など演習形式を採用して行います。教員免許取得の希望のない学生が履修しても苦痛となります。そのため、よく注意して履修手続きをしてください。		<b>【講義計画】</b> 1. 学校における教科教育 陶冶と訓育 2. 地理歴史科の目標 3. 地理歴史科のカリキュラム構成 4. 教育実習と授業実践 5. 授業指導案の作成と成績評価 6. 地理歴史教育と人権学習・同和教育の実践 7. 学校地理教育・歴史教育の目標と課題 8. 生涯学習社会と地理歴史教育		
<b>【成績評価の方法】</b> 指定した書式にもとづく「授業指導案」をレポートとして作成し提出する。このことを単位認定の基礎条件とする。演習形式。		<b>【参考文献】</b> 文部科学省『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局 井原政純『社会・地理・公民科基礎論』多賀出版 永井滋郎・平田嘉三『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書		
<b>【教科書】</b> 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』大阪書籍				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・地歴科教育法	02	通 期	4 単位	山 崎 充 彦
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>地理・歴史科の教員免許取得希望者の必修単位である。 知識の詰め込みに終始すると捉えられがちなこの教科の学習目標は、一体如何にあるべきかに留意しつつ、授業運営を行い、各自に模擬授業を行ってもらおう。 もっぱら教員免許取得希望者を対象とし、模擬授業を中心とした演習形式とするので、教職希望しない者にとっては、あるいは苦痛を感じるかもしれない。 その点、留意の上、登録履修されたい。 なお、担当者の専門との関係上、歴史分野に重点をおきたいと思うが、地理分野に主たる関心を持つ者の登録履修も歓迎する。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>開講当初は、担当者が指導案作成などについて講義するが、この授業は、そもそもが教員免許取得希望者を対象とするものであり、履修者全員が模擬授業担当を義務づけられ、以下のような形で授業への積極的参加が要求される。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、各自がそれぞれ学習指導案を作成する。</li> <li>2、その指導案に基づき、毎回一人に模擬授業を行ってもらおう。(原則50分授業)</li> <li>3、その際、当日の出席者全員に対して、レジュメとして指導案および当日の授業資料を配布する。</li> <li>4、模擬授業終了後、出席者全員で、その授業の問題点について討議する。 ＝指導案そのものの問題点、模擬授業と指導案との相違点、授業の問題点等々。</li> <li>5、当日の出席者は、その模擬授業についてまとめ、当日ないしは翌週にレポートを提出する。</li> </ol> <p>模擬授業担当の日時については、開講当初に相談の上、決める。 受講者の人数にもよるが、少数の場合、年に複数回、模擬授業の担当が当たることになるかも分からないので、その点、留意されたい。</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>学習指導案の作成、模擬授業の内容、討論への参加、レポートの提出、これらにより、総合的に評価する。</p> <p>模擬授業の担当は、単位認定の必須条件である。</p> <p>模擬授業の担当日に無断欠席した者は理由の如何を問わず、その時点で「不可」と判定する。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>文部省、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』、実教出版</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・公民科教育法	01	通 期	4 単位	飯 島 敏 文
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>社会科は第2次大戦後にはじめて登場した教科です。この半世紀、社会科のあり方については、さまざまな議論が戦わされてきました。このことは、社会科という教科が、それだけ多くの関心を集めている証でもあります。 本授業の前期においては主に社会科を取り上げ、社会科の成立、成立期社会科の意義、さらにはその後の議論を考えることを通して、現代社会科の可能性と限界を探ることとします。また後期においては主に公民科を取り上げ、公民科の成立、公民科の特徴、公民科の意義などを明らかにした上で、終戦直後の公民教育構想を振り返ります。前期及び後期においては、それぞれ、社会科の学習指導案及び公民科の学習指導案の作成に取り組みます。 とくに「社会科嫌い」の子どもが多く生まれている現実には、社会科授業・公民科授業が魅力あるものになっていないことを証明しています。事実を覚えるのが社会科授業・公民科授業の目的ではありません。社会生活を理解すること、そして、その理解の上で建設的に行動できる人間を育てることが社会科授業・公民科授業には求められます。すべての教科にとって普遍的な事柄についても多く触れていく予定ですので、単なる社会科・公民科免許のための講義と思わずに、自らの授業観・教育観の転換をめざしていただきたいと思えます。既成観念にとらわれない学習指導案を考案してください。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>前1 社会科成立前史</li> <li>前2 社会科の成立</li> <li>前3 成立期社会科の特徴</li> <li>前4 成立期社会科の意義</li> <li>前5 成立期社会科の実践</li> <li>前6 成立期社会科の課題</li> <li>前7 社会科学習指導要領の変遷と現代社会科</li> <li>前8 社会科学習指導案の作成</li> <li>後1 公民科成立までの経緯</li> <li>後2 公民科の成立</li> <li>後3 公民科の特徴</li> <li>後4 公民科の意義</li> <li>後5 公民科の実践</li> <li>後6 公民科の課題</li> <li>後7 終戦直後の公民教育構想と現代公民科</li> <li>後8 社会科学習指導案の作成</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>出席、レポート、期末試験を総合して評価する。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>授業中にその都度紹介する</p>			
<p><b>[教科書] 必須</b></p> <p>中学校学習指導要領 高等学校学習指導要領</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・公民科教育法	02	通 期	4 単位	宮 本 進
<b>【講義概要・学習目標】</b> 21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。地球の人口は約61億人、主権国家は190余である。その中で約13億人が1日1ドルで生きようとし、約8億人が飢えに苦しみ、約12億人が安全な水を飲めず、約10億人が読み書きが出来ないなど、すべてが豊かな生き方、暮らしが出来ている訳ではない。日本は経済低迷の最中で、国民は漠とした不安の中にいる。また、地球の幾つかの地域では紛争中であり、日本もそれには無関係ではいられない。社会科・公民科は現代的な課題に向き合う重要な教科だと言える。教員の立場の人間としてどう向き合うのか、生徒達にどう向き合わせるのか。これを基本的問題意識として提起しつつ、教科の目的と役割、教育課程の変遷、教育課程の内容や教授方法などを考察しながら社会科・公民科教育の在り方を研究する。講義だけでなく、討論や、模擬授業などを取り入れた参加型の授業にしたい	<b>【講義計画】</b> 1. はじめに＝講義概要など 2. ～ 3. どの社会に生きてるのか 4. 学校教育と生徒の現状 5. 教員の現状は 6. どの教員になるのか 7. 戦後の中等社会科・公民科教育 8. 社会科・公民科の役割 9. 中等社会科・公民科教育の課題 10. ～ 12. 社会科指導要領の内容と授業 13. ～ 15. 公民科指導要領の内容と授業 16. ～ 17. 模擬授業の準備と学習指導案の作成 18. ～ 24. 模擬授業による授業研究 25. まとめ 26. テスト			
<b>【成績評価の方法】</b> 出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。	<b>【参考文献】</b> 授業の中で適宜紹介する			
<b>【教科書】</b> 授業ノート・資料などをプリントして配付する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
商業科教育法		通 期	4 単位	松 原 勇
<b>【講義概要・学習目標】</b> 現代における経営革新時代に商業科教員を目指す学生を対象にした高等学校教員免許取得のための必修科目である。 産業経済が激動する商業教育は、グローバル・スタンダード（国際標準）を基本にして、国際化・情報化に対応できる人材の育成が急務である。近年、特に優れた職業倫理を身につけ、「心の充実」「思考力の強化」「高度で専門的な知識・技術」等の習得が不可欠である。このほど発表された教育基本法改正案（中間報告）・新学習指導要領を踏まえ、21世紀に生きる人材は「アイデンティティ」「豊かな人間性」「一人一人の個性」等を伸ばす能力を十分に生かすことを大きな目標にしている。その趣旨を踏まえ、将来教育に携わる者は、常に教育理念を念頭におきながら、商業教育の本質に立脚した姿勢と自覚と責任をもって臨まなくてはならない。 本講は、教育者としての人間力を磨くと共に産業経済の現状と将来の商業教育を展望しつつ、教育上の本筋を究明する。特に年間指導計画、毎時の学習指導案の作成、学習指導法、模擬授業など教育者が修得すべき方法論を重点的に網羅して講義する。	<b>【講義計画】</b> 1 商業教育の意義と目的 2 商業教育の変遷 3 現在の高等学校の商業教育 4 商業教育における国際化と情報化 5 教育課程の編成 6 学習指導法（模擬授業の展開） 7 学習指導計画と教育評価 8 教員の資質能力と研修制度 9 職業資格制度と検定試験制度 10 今後の商業教育の展望等			
<b>【成績評価の方法】</b> 主として、出席を厳しく重視して評価する。なお、模擬授業の実践面の評価、期末試験等も勘案のうえ、総合評価とする。	<b>【参考文献】</b> 高等学校学習指導要領解説（商業編 文部省）			
<b>【教科書】</b> 松 原 勇(編著)「商業科教育法」。(ぎょうせい)				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語科教育法 I		通 期	4 単位	島田勝正
<p><b>【講義概要・学習目標】</b>  英語教員志望者を対象とする。英語科教育の基礎理論を概観するとともに、その理論の教育実践への適用を考察する。授業内容は第二言語習得論、英語教育目標論、指導課程論（シラバス論、授業計画）、指導方法論、指導技術論（4技能、文法、語彙）、教材論、測定評価論、学習者論、教師論と多岐にわたる。単に理論の紹介に終始せず明日の教育実践を射程に入れたワークショップを展開する。その中で受講者は学習の促進としての指導は如何にあるべきかを探求することになる。その体験は授業案作成、マイクロティーチングとして具現化される。本講義の主たる目的は、中学校、高等学校、大学等で経験した英語教育や英語学習を基盤に作り上げた「思い込み(belief)」から解放し、望ましい英語授業のあり方を自己評価、自己点検するための視点、観点を提供することにある。問題意識をもって授業に臨んでほしいので、毎回「課題」提出を課す。課された分担作業は責任をもって果たすこと。授業は教科書の指定ページを読み、課題を終了していることを前提にすすめる。</p>	<p><b>【講義計画】</b>  1. ガイダンス 2. 教授・学習・評価（教授の役割） 3. 第二言語習得論1（習慣形成理論と創造的構築） 4. 第二言語習得論2（学習転移） 5. 第二言語習得論3（誤答分析） 6. 第二言語習得論4（インプット仮説） 7. 第二言語習得論5（形式教授の役割） 8. 言語能力の分類 9. 文法教授（意識化活動） 10. 第二言語習得論6（有標性理論、教授可能性理論） 11. 目標論1（コミュニケーション能力） 12. 目標論2（学習指導要領） 13. 定期試験 14. コミュニカティブアプローチ1（機能シラバスと文機能分析） 15. コミュニカティブアプローチ2（指導法） 16. スピーキング（情報差活動） 17. リスニング（背景知識の活性化） 18. リーディング（発問の種類と方法） 19. ライティング 20. 語彙（記憶術） 21. 授業案、授業分析 22. テスティング1（妥当性、信頼性） 23. テスティング2（テスト項目改善） 24. テスティング3（技能判断） 25. テスティング4（項目分析） 26. 定期試験</p>			
<p><b>【成績評価の方法】</b>  *得点配分は以下の通り。(1)課題1回3点×12回=36点 (2)レポート24点 (3)定期試験40点  *次のいずれかに該当する場合は単位を認定しない。(1)各学期2回を越えて欠席した場合 (2)定期試験を無断で欠席した場合 (3)レポートを提出しない場合</p>	<p><b>【参考文献】</b>  1. 白畑他(著)『英語教育用語辞典』大修館書店 1999  2. Richards, J., J.Platt and H.Platt (eds.) <i>Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics:Third Edition</i>.Longman. 2002.  3. 青木(編)『英語授業実例事典 I, II』大修館書店 1990,1994  4. 山田、望月(編)『私の英語授業』大修館書店 1996  5. 青木(編)『英語授業の組立て』開隆堂 1990</p>			
<p><b>【教科書】</b>  教科書：青木(編)『新しい英語科教育法』現代教育社 2002  Course Notes：島田勝正(編著) <i>Methods of Teaching English as a Foreign Language: Testing of Teaching (Third Edition)</i>  (ガイダンス時に配布する。)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報科教育法		通 期	4 単位	藤間 真
<p><b>【講義概要・学習目標】</b>  ますます進展する情報化社会にあって、高等学校における普通教科・専門教科「情報」においては、  ①課題や目的に応じて必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況を踏まえて発信・伝達できるような情報活用の実践力、  ②情報手段の特性の理解、情報の適切な処理、自らの情報活用を評価・改善するための科学的な理解、  ③社会生活の中で情報や情報技術がもつ役割と影響を理解し、情報モラルと情報に対する責任を自覚し、情報社会の創造に参画する望ましい態度を系統的・体系的に習得・育成させることが求められている。  この授業においては、その教育目標を達成するために、教科構造、ねらい、内容、指導法について系統的・体系的に理解するとともに、授業実施に当たって必要とされる指導計画、教材研究、授業設計、実施、評価、改善等に関する理解・能力を体験的に習得する。授業の形態は、講義、演習、模擬授業を組み合わせる。</p>	<p><b>【講義計画】</b>  ・ IT革命の現状と展望  ・ 初等中等教育における「情報」教育の役割と課題  ・ 「情報」の教科構造  ・ 学習指導要領における普通教科「情報」の目標と内容  ・ 学習指導要領における専門教科「情報」の目標と内容  ・ 「情報」の授業の実践  ・ 年間指導計画の作成  ・ 単元指導計画の作成と内容の取り扱い  ・ 教材研究の実践  ・ 学習指導案の作成  ・ 模擬授業及び評価と改善  ・ まとめ</p>			
<p><b>【成績評価の方法】</b>  講義への参加、課題への取り組み、期末課題、模擬講義等を総合して評価する。</p>	<p><b>【参考文献】</b>  情報科教育法 岡本敏雄 丸善  情報科教育法 大岩元 オーム社</p>			
<p><b>【教科書】</b>  高等学校学習指導要領解説 情報編 開隆堂出版</p>	<p>その他講義の進行状況に応じて指示する。</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
福祉科教育法		通 期	4 単位	林 陸雄
<b>[講義概要・学習目標]</b> 高齢化社会が進展する今日、社会福祉の役割は多様化し増大しつつある。そのことに伴って、社会福祉についての基本的認識を深め、適切な福祉サービスを提供するための基本的な知識・技術を高めることが広く期待されている。さらに、多様化する社会福祉の課題を主体的に解決し、社会福祉の増進に寄与しようとする人材の育成は重要な課題でもある。 高等学校福祉科の教育目標、内容、指導法について系統的に理解するとともに、授業実施に当てって必要とされる指導計画、教材研究、授業設計、実施、評価、改善等に関する理解・能力を体験的に修得する。授業の形態は、講義、演習、模擬授業を組み合わせる。	<b>[講義計画]</b> 1. 福祉科教育に期待されること 2. 今日の福祉課題 3. 学習指導要領における「福祉」の目標と内容 4. 「福祉」の授業の実際 5. 年間指導計画の作成と目標分析 6. 単元指導計画の作成 7. 教材研究の実際 8. 学習指導案の作成 9. 模擬授業 10. 模擬授業について評価と改善 11. まとめ			
<b>[成績評価の方法]</b> 毎回の小レポート、期末考査の結果を総合して行う。 ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。	<b>[参考文献]</b> 授業中に、適宜紹介する。			
<b>[教科書]</b> 矢幅 清司・細江 容子 編著 『改訂 高等学校学習指導要領の展開 福祉編』 明治図書				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
道徳教育の研究		秋学期	2 単位	徳 永 正 直
<b>[講義概要・学習目標]</b> 近年マスコミを賑わしている未成年者による凶悪犯罪や、援助交際、オヤジ狩り、学級崩壊、いじめ等の子どもたちの「荒れ」に対処するために、道徳教育のなお一層の充実強化が求められている。しかし、「道徳」授業の評判はあまり良くないようである。そこで何故「道徳」授業がつまらないのかを考え、子どもたちの問題行動の背景と原因をアリス・ミラーらの「反教育学」をひとつの手がかりとして考察し、道徳性発達の理論に依拠した「道徳」授業の可能性を、教育的タクト論の視点から検討する。 とかく問題が多いとされる「道徳」授業や道徳教育の課題設定のあり方について、各自が自分自身の見解を持つようになることが目標である。	<b>[講義計画]</b> ①「教育」の重要性と危険性 ②「道徳」授業批判 ③子どもの問題行動を考える。1980年以後の問題行動の変遷 ④アリス・ミラーの「反教育学」の立場から ⑤道徳教育の課題 学習指導要領の解説と問題点 ⑥道徳性発達の理論 ピアジェ、コールバーグ等 ⑦ジレンマ資料に基づく「道徳」授業の意義と問題点 ⑧実際の授業の展開（ビデオ視聴） ⑨教育的タクトによる「道徳」授業の可能性 ⑩賞罰問題と子どもの人権 ⑪この講義の総括と今後の課題の提示 なお、④⑥⑨についてはそれぞれ二時間かけて解説する。			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験で評価する。	<b>[参考文献]</b> 講義中にそのつど指示する。			
<b>[教科書]</b> 徳永・堤・宮嶋・林・榊原著『道徳教育論—対話による対話への教育』（ナカニシヤ出版、2003年）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
特別活動論	01	春学期	2単位	宮本 進
<b>【講義概要・学習目標】</b> 21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。また、幾つかの地域では紛争中であり日本もそれに無関係ではいられない。さらに、少子化、核家族化などが進むなかで、集団活動や人間関係をつくることが不得意な生徒が増加していると言われる。これが生徒達の問題状況を生む背景ともなっている。特別活動は教科指導とともに教育課程に位置づけられている。その内容としてはホームルーム活動（中学校では学級活動）・生徒会活動・学校行事から構成される。目的は「集団や社会の一員としての態度を養うとともに、自己を生かす能力を養うこと」とされる。受講生自らがこの力をどう養うのかを提起しつつ、それぞれの内容について具体的な諸実践を考察し、特別活動のあり方を研究する。討論等を取り入れた参加型の授業にしたい。	<b>【講義計画】</b> 1. はじめにー講義計画など 2. 指導要領における特別活動の目標と内容 3. ～ 5. ホームルーム活動の実際とその基本的視点 6. ～ 8. 生徒会活動の実際とその基本的視点 9. ～ 11. 学校行事の実際とその基本的視点 12. 必修クラブの廃止と部活動の意義 13. まとめとテスト			
<b>【成績評価の方法】</b> 出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。	<b>【参考文献】</b> 授業の中で適宜紹介する			
<b>【教科書】</b> 授業ノート・資料などをプリントして配付する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
特別活動論	02	秋学期	2単位	小島 孝敏
<b>【講義概要・学習目標】</b> 日本の主な教育改革は、明治の学制発布・大戦後、そして、現在の第3次改革と言われる。今次の改革は、学校週5日制の完全実施や、「生きる力」と「ゆとり」をキーワードに提唱し、学びの力を育む・“心の教育”への転換を目指している。 現場では、創意工夫を重視した新学習指導要領への移行措置も終え、幼稚園は平成12年に小・中学校は平成14年に、高等学校は平成15年度からの実施で進行中である。学校週5日制度下の教育課程編制による授業展開がスタートした。改定で創設された「総合的な学習の時間」は、教育改革の柱ともなるものであり、成否は21世紀の教育のあり方を決める核であるとされ、創意ある展開が期待されている。 主体的学習の基盤で、全ての学習を統合・発展する特別活動の充実、 「特色ある教育・学校づくり」に欠かせなく、子どもたちの調和のとれた豊かな人間形成に係わる資質が、特別活動の目指すものである。「学級活動、児童・生徒会、クラブ活動、学校行事」は、自主的な集団活動を通じた生活体験が有効で大切であり、重要な役割を果している。特に、①ガイダンス機能の充実。②自然体験や社会体験の充実。③国際協調精神を培うことが強調され、現代社会における閉ざされがちな子どもたちに、生活経験を開き、社会関係能力の向上や改善を求めるところにあります。 その意図する目標を表現するためには、まず教師自身が、目標で求められている諸能力を獲得する必要があり、現実の子どもたちを指導するための「理論と実践力」を持たなければなりません。 この授業では、教育改革の趣旨を学びながら、受講生自らの社会関係能力を涵養すると共に、特別活動の教育目標と内容を実践する場となります。基礎・基本については、人権と生徒指導の視点がベースです。講義教室が学級活動そのものとなり、すべて自主的なボランティアサービスで運営します。「各学校園の特色ある取組」の学習を通じて、教育実習前のプレ演習を兼ねた「現場訪問や交流」、「見学・観察・補助活動等の実地体験学習」、班別グループワークでの「ケーススタディ」や「プレゼンテーション」、小学生を迎えての「大学探検キャンパスガイド」・中学生対象の「進路講話と進路グループ相談活動」等の地域と連動した活動も採り入れて進めます。 従って、地域と連携（保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・関係機関等）しての現地実践等が多く、限られた授業回数の中で集約的に展開するので、全出席を守り遅刻や早退のないことが望ましい。	<b>【講義計画】</b> 1. 授業びらき：オリエンテーション。 ① 学習計画・グループ班分け等。 ② 特別活動の内容と目標。 2. 求められる教育改革の総点検。 ① 大阪の教育改革の取組状況。 ② 学校週5日制と総合的な学習活動の対応。 ～〔国際化・環境問題・少子高齢化社会等〕。 ③ 21世紀教育新生プラン。 3. 教育課程改革の試みと各領域別のポイント。 〔学校行事・クラブ活動・学級活動・生徒（児童）会活動〕。 4. 各学校園の特色ある教育の事例～「あんな学校・こんな学校」VTR等。 5～8. 体験学習「実地交流活動」～見学・観察・補助活動・キャンパスガイド ・進路指導講話の発表・進路指導相談等。 9～10. 総合的学習の演習～特色ある活動の取組と実践例・ゲスト講話等。 11. まとめ・班別プレゼンテーション等。 12. テスト。 ☆課題レポート。 特別活動のうち、具体的な内容について一つ以上のプログラムに参加し、観察補助活動を行う。その模様をレポートして提出する。書式は別に指定する。			
<b>【成績評価の方法】</b> 出席回数、授業内での小レポート、課題レポート、期末考査の結果等を総合して行う。但し、2/3以上の出席がなければ評価はしない。	<b>【参考文献】</b> 授業中にプリントを配付する。 その他 授業の中で適宜紹介する。			
<b>【参考文献】</b> 特になし。 必要なプリント類は、その都度用意する。				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育方法学	01 02	春学期 秋学期	2単位 2単位	冷水啓子
[講義概要・学習目標] この「教育方法学」では、子どもが知的好奇心や探求心をかき立てられながら主体的に学び、学ぶ楽しさ・充足感を味わうことのできる学習とは何かを考える。新しい学習指導要領では、「生きる力」の育成が重視されているが、それは「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」といった側面を持つ。したがって、ここでは、そのような能力を育成するための「授業の方法および技術」に関する基礎的理論と授業（教科学習および総合的学習）でのその活用法について学び、実践的指導能力を培うべき基盤作りを目指す。 具体的には、はじめに、教授・学習活動に関する基礎的理論を概観し、子どもの学習意欲を促進させる効果的な教授・学習方法や教育メディアの特徴を学ぶ。つぎに、子どもの年齢や個性に即した学習過程を支援するためのコンピュータ教育利用を取り上げ、コンピュータ実習を通じその実際を体験的に理解する。さらに、4年次に実施される教育実習では、ここで各自が習得した新しい教育メディアや教授・学習法を実際に活用し、その効果のほどを確認してみたい。 なお、これは、教育職員免許法により規定されている「教職に関する科目」の一つとして、本学教職課程では必修とされている随意科目である。授業に関連する補足資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などにより適宜提供する。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。	[講義計画] 1. 教授・学習活動 1) 学習の原理 2) 科学的認識と社会的認識 3) 学習と認知 4) 学習への動機づけと学習意欲：知的好奇心と学習方法 2. 教授・学習過程 1) 授業における教授・学習過程 2) 個人差と学習指導法 3. 学習指導と学習評価 1) 学習指導過程 2) 教育測定と学習評価 3) 心理テストの利用 4. コンピュータ教育利用：その理論と技法 1) コンピュータ教育利用に関する諸問題 2) 電子メールやインターネットの利用 3) 文章作成ソフトや表計算ソフトの利用 5. 全体のまとめ  〔但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある〕			
[成績評価の方法] 出席を重視する（原則として1/3以上の欠席は認めない）。学期中、必要に応じてレポート提出を求める。学期末には論述試験を実施する。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。	[参考文献] 波多野諄余夫・稲垣佳世子（共著）『人はいかに学ぶか―日常的認知の世界―』（中公新書） 情報教育学会他（編）『インターネットの光と影』（北大路書房） 松原達哉（編著）『最新心理テスト法入門』（日本文化科学社） 三浦香苗 他（編）『教員養成のためのテキストシリーズ2 発達と学習の支援』（新曜社） 大村彰道（編）『教育心理学Ⅰ―発達と学習指導の心理学―』（東京大学出版会） 多鹿秀継（著）『教育心理学―「生きる力」を身につけるために―』（サイエンス社） 梅本堯夫 他（編）『心理学―心のはたらきを知る―』（サイエンス社） 他			
[教科書] 追って指示する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
生徒指導法	01	春学期	2単位	辻川信孝
[講義概要・学習目標] 今、学校は様々な問題を抱えている。いじめ、不登校、学級崩壊、校内暴力、高校中退など生徒指導上の問題が多発し、学校教育のあり方が問われている。一方、新しい教育のあり方が議論され、個性重視、生きる力の育成、学校週5日制への対応等、生徒指導の新しい課題も指摘され、教育改善の取り組みがすでに始まっている。 このような状況の中で、教育実践者に、これら生徒指導上の問題の本質をとらえる目と個々の子どもに必要な援助方法を身につけることが求められている。 本授業では、学校現場の事例を中心に、参加型の授業を進めていきたい。事例から、問題の本質を見つけ、自分なりの考えをまとめ、グループワークにより、問題解決に向けての考え方（法則性）を習得してもらいたい。 併せて、数多くの事例に接することにより、適切な対応（生徒指導の技術）と子どもたちに接する姿勢（生徒指導の心）を学びとってほしい。	[講義計画] 1. 生徒指導とは ①授業計画と進め方 ・子どもたちの状況と生徒指導のあり方 2. 事例研究（学校現場の実践から学ぶ） ①校則・生徒心得 ②いじめ ③不登校 ④授業妨害・学級崩壊 ⑤校内暴力 ⑥性に関する問題行動 3. 求められる生徒指導 ①子どもたちへのかかわり方 ②楽しい授業づくり ③生き方としての進路指導（職場体験学習） ④学級経営に生かせるカウンセリングの演習 ⑤地域と一体の子育て支援活動 4. まとめ			
[成績評価の方法] 出席状況、期末の最終レポートの結果を総合的に評価して行う。但し、2/3以上の出席がなければ評価しない。	[参考文献] 授業の中で適宜紹介する。			
[教科書] 毎時間、プリントを配布する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
生徒指導法	02	秋学期	2単位	宮本進
<b>[講義概要・学習目標]</b> 21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。幾つかの地域では紛争中であり日本もそれに無関係ではいられない。また、日本経済は低迷中である。生徒達は将来への予測が難しく、目標が見えにくい。特に、将来の進路への漠とした不安の中にある。それが生徒達の種々の問題状況を生む背景ともなっている。生徒指導は教科指導以外の指導のことであり、その内容は学業指導・進路指導・個人的適応指導・社会性指導・余暇指導・健康、安全指導などの領域がある。究極の目的は「自らの生き方を構築する力の育成」にあると言える。受講生自らがこの力をどう養うのかを提起しつつ、生徒達の状況を踏まえ、進路指導の領域を中心に各領域について具体的な諸ケースの実践を考察し、生徒指導のあり方を研究する。討論等を取り入れた参加型の授業にしたい。	<b>[講義計画]</b> 1. はじめに - 講義計画など 2. 教員達を取り巻く状況 3. 生徒達を取り巻く状況 4. 生徒指導とは何をするのか 5. 生徒を理解し生徒に自己を理解させるとは 6. ~ 8. 生徒指導の実際と原理・原則 9. ~ 12. 進路指導の実際と原理・原則 13. まとめとテスト			
<b>[成績評価の方法]</b> 出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。	<b>[参考文献]</b> 授業の中で適宜紹介する			
<b>[教科書]</b> 授業ノート・資料などをプリントして配付する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育相談	01 02	春学期 秋学期	2単位 2単位	林 陸雄
<b>[講義概要・学習目標]</b> 中央教育審議会の答申に示された目標「『生きる力』を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心、正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくむ」方策と呼ぶのが、教員免許法の改定であり、新設された必修科目「教育相談」である。 現代社会の諸矛盾は直接・間接に子どもたちの生活に影響し、子どもたちを強いストレス下においている。その結果として、様々な神経症や心身症が小学生段階から現出している。これらの諸現象は、本人または家族に起因するとみられ勝ちであり、いっそう子どもたちを追い詰め苦しめている。 子どもたちが抱え込んでいる諸問題を教育相談という観点からとらえ直し、適切な支援・援助をする窓口としての機能を学校教育相談活動として位置づけたい。その機能を遂行するための基礎・基本について概説する。履修する以上、必ず教職に就くという強い目的意識を持って受講すること。 なお、より理解を深めるために体験学習をも採用する予定である。教育相談機関での参観と実習も課外プログラムとして組む予定である。	<b>[講義計画]</b> 1. 授業びらき・生徒指導・教育相談とは 2. 生徒指導の体制・教育相談の体制 3. 問題の把握・問題の理解 4. 教師・生徒関係 5. 学校不適応・いじめと孤立 6. 神経症・心身症 7. 非行・勉強嫌い・無気力 8. カウンセリング 9. カウンセリング 10. 行動療法 11. 交流分析 12. 家族療法 13. まとめ			
<b>[成績評価の方法]</b> 毎回の小レポート、期末考査の結果を総合して行う。 ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。	<b>[参考文献]</b> 授業中に、適宜紹介する。			
<b>[教科書]</b> 高野清純 監修 佐々木雄二 編 『図でよむ心理学 生徒指導・教育相談』 福村出版				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
同和教育論	01	通 期	4 単位	黒 田 伊 彦
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>今年、差別と排外主義の負の遺産というべき関東大震災の朝鮮人虐殺80年の節目の年である。また、「人権教育及び人権啓発の推進法」が実施され、人権教育の広がりや深さを支える同和教育のあり方が問われている。</p> <p>春期は、部落への差別偏見の由来や今も部落差別が続いている要因、部落の起源や部落差別への関心の歩みから、部落へのマイナスイメージをプラスイメージに転換していく事実と視点を明らかにする。</p> <p>秋期は、同和教育の歩みから融和教育、同和教育、解放教育の違い。「いじめ」を克服する同和（解放）教育のあり方及び部落悲惨史論・低位性論を克服する部落問題学習のあり方を考察し、部落問題の教科書記述批判や学習教材、集団主義と仲間づくり、学力保障と進路保障、反戦平和教育と部落問題など、反差別・人権教育の現状と方向性を明らかにする。</p> <p>教員採用試験の同和・人権教育関係問題の演習を行う。</p> <p>教科書、補充プリント、映像資料を用いる。</p> <p>春期は島崎藤村の「破戒」の課題研究と読書感想文。原作と映画との比較についてのレポート提出を課す。</p> <p>秋期は「いじめ」を克服する教師のあり方についての資料によるレポートを課す。</p> <p>人権教育（部落問題）の履修が望ましい。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>〈春期〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 映画「夜明けをめざして」と「人権教育のための国連10年」で培うものから、同和（解放）教育のあり方を考える。</li> <li>(2) 部落差別を支えるケガレ意識の由来と日常性</li> <li>(3) 気づいていない部落差別ー「けじめ」「ヤブ医者と解体新書」等</li> <li>(4) 部落差別の本質ー部落差別が今も続いている理由</li> <li>(5) 部落の起源ー近世封建社会の形成と「かわた」</li> <li>(6) 〃ー一向一揆と近世封建社会の賤民制</li> <li>(7) 部落差別との関わりー洪染一揆 VTR「触れ書き一揆」</li> <li>(8) 洪染一揆の学習教材化、劇、史跡調査など</li> <li>(9) 解放令と身分差別の再編成ー部落差別と天皇制</li> <li>(10) 映画「破戒」（119分）の前半</li> <li>(11) 映画「破戒」の後半、スライド「破戒の風土ー藤村と部落問題」</li> </ol> <p>〈秋期〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(12) 西光万吉と全国水平社ーVTR「よき日のために」</li> <li>(13) 部落解放の方策と「ねた子を起こすな論」批判</li> <li>(14) 戦前の融和教育ー伊東茂光と崇仁教育「同和」の語源と戦時の同和教育</li> <li>(15) 戦後の同和（解放）教育の歩みと人権総合学習</li> <li>(16) 「いじめ」の原因とそれを克服する同和（解放）教育と教師のあり方。</li> <li>(17) 部落問題学習の基本的視点ー部落悲惨史論の克服を「教科書無償化を勝ちとった部落の子供たち」の教材から考える。VTR「天気になあれ」</li> <li>(18) 差別と偏見ーVTR「青い目、茶色い目」</li> <li>(19) 差別と差別意識の働きー差別事象の共通性</li> <li>(20) 教員採用テストの人権・同和教育問題演習</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>春期はテストと「破戒」に関するレポートと出席点で評価する。</p> <p>秋期はテストと「いじめ」に関するレポートと出席点によって評価する。出席を重んじる。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>黒田 伊彦（著）『部落史紀行』（拓植書房新社）  中野 陸夫・池田 寛・中尾 健次・森 実（著）  『人権教育をひらく 同和教育への招待』（解放出版社）  藤田 敬一（編）『「部落民」とは何か』（阿吽社）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>黒田 伊彦（編著）『部落問題・人権・同和教育教材集』（拓植書房新社）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
同 和 教 育 論	0 2	通 期	4 単位	寺 木 伸 明
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>本講義では、まず同和教育とはどのような教育をいうのかを説明し、そしてそもそも同和教育は必要なのか、ということについて共に考えてみたい。</p> <p>次に、現在、部落の子供たちをとりまく、生々しい差別の実状について、ビデオなどを見ながら理解を深めていきたい。そうした現実を踏まえて、現在、小学校・中学校・高校でどのような同和教育の実践が行われているのかを説明する。その際、中学校と高校の先生にゲスト講師としてきていただき、教育現場での取り組みの現状を報告していただく予定である。</p> <p>つづいて、同和教育の歴史、部落問題学習の実際の進め方などについて、最新の研究成果を踏まえて講義する。</p> <p>秋学期の後半は、グループごとに部落問題学習に関する模擬授業を行ってもらおう。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 同和教育とは何か</li> <li>2 同和教育は必要か</li> <li>3 被差別部落の子供をとりまく差別の現状</li> <li>4 中学校における同和教育の実践（ゲスト講師予定）</li> <li>5 高校における同和教育の実践（ゲスト講師予定）</li> <li>6 同和教育の歴史</li> <li>7 部落問題学習の進め方</li> <li>8 同和教育の成果と課題</li> <li>9 部落問題学習の模擬授業（グループで）</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>前期のレポートおよび学年末の試験の成績を基本にして出席点（適宜、出席カードに簡単な感想を書いてもらう）を加味して総合的に評価する。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>寺木伸明・野口道彦編『部落問題論への招待 資料と解説』解放出版社</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>中野陸夫・池田寛・中尾健次・森実『同和教育への招待』解放出版社</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
文化社会学		春学期集中	4単位	北川 紀男
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>文化は人間にとって第二の本能ともいわれ、人間と文化は不可分の関係にある。それ故に、人間の社会を研究する社会学にとって、文化の研究は欠くことのできない研究課題である。最初に、文化社会学の学説史を概観し、ついで人間と文化との間に介在する根源的な関係に立ち戻って、文化の概念を尋ね、文化は社会によって制約されると同時に社会を制約するという、すぐれて社会的事象であることを明らかにする。</p> <p>ついで、以上の基礎的な認識を踏まえて、複雑多岐に分化し、めまぐるしく変転する現代文化の動向を解明するために、「大衆化」「国際化」「情報化」「共生化」の視点にたつて、批判的に考察をすすめてみたい。</p> <p>現代文化は、複雑かつ激しく変転しており、ともすれば無批判的に追従しがちであるが、この講義を通じて、現代文化を理解する自らの視座を学びとって欲しい。</p>		<p>[講義計画]</p> <p>講義は、以下のテーマに従って進める。</p> <p>①イントロダクション ～社会学的认识について～                  ②社会学における文化の研究 ～歴史と方法論～                  ③文化の概念 ～シンボル・意味・価値～                  ④文化と社会規範 ～規範・社会化・タブー～                  ⑤生活文化 ～生活様式としての文化～                  ⑥文化と文明 ～文明社会の諸問題～                  ⑦知識の社会学 ～知識・イデオロギー・科学～                  ⑧大衆化と文化 ～大衆文化・その被操作性～                  ⑨国際化と文化 ～民族文化・国民文化・異文化間コミュニケーション～                  ⑩情報化と文化 ～情報化社会・ニューメディア～                  ⑪共生化と文化 ～高齢者・障害者・ジェンダー～                  ⑫文化変動と社会変動</p>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>成績評価は、与えられた課題に対するレポートと期末試験に基づいて行う。</p>		[参考文献]		その都度、指示する。
<p>[教科書]</p> <p>北川紀男著『文化社会学研究～現代文化の理解にむけて～』(1999年、八千代出版)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本近代史		春学期集中	4単位	佐賀 朝
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>本講義では、「近代大阪の都市社会史」というテーマのもと、近代の巨大都市である大阪を対象に、その社会構造の分析を試みる。</p> <p>特に、①都市住民の生活実態やそこで取り結ばれる多様な社会関係を具体的に明らかにすること、②巨大都市をノッペラボーなものとして捉えるのではなく、その構成要素であるさまざまな地域社会の特色や個性に注目すること、③フィールドワークや聞き取りも含めたさまざまな史料を多面的に活用し、分析すること、などを重視したい。</p> <p>まず前半では、明治期の都市内の地域社会として、遊廓、貧民窟と盛り場、工場地域などを取り上げて、その社会構造を分析していく。後半では、大正～昭和戦前期の都市社会について、米騒動や住宅問題などの都市社会問題、都市における「俠客」(きょうかく)の役割、大阪の町内会と学区、などを取り上げて論じていく。</p> <p>また、大阪の歴史に関する博物館の見学や大阪のまちを歩くフィールドワークも企画する。</p> <p>全体を通して、人間が生活・労働をいとなみ、文化が創造される場である地域社会の構造とその変化を的確に捉える方法を学び、現代の地域社会が抱える課題に向き合うための基本的な視点を獲得することを目標とする。</p>		<p>[講義計画]</p> <p>おおむね以下のようなテーマを論じる予定。</p> <p>明治期大阪の都市内地域                  遊廓と地域社会—松嶋遊廓の成立—                  長町と千日前—貧民移転問題を素材に—                  工場と地域社会—造幣局を素材に—</p> <p>米騒動の勃発と方面委員制度の発足・展開                  日本橋「裏長屋」の生活と不良住宅地区改良事業                  大正～昭和期の「俠客」と都市社会                  住宅問題と借家争議                  大阪の町内会・学区と地域支配</p> <p>ほか</p>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席、レポート、定期試験などにより総合的に評価する。</p>		[参考文献]		
<p>[教科書]</p> <p>随時、プリント等を配付する。</p>		<p>原田敬一『日本近代都市史研究』(思文閣出版、1997年)                  広川禎秀編『近代大阪の行政・社会・経済』(青木書店、1998年)                  芝村篤樹『日本近代都市の成立—1920・30年代の大阪—』(松籟社、1998年)                  佐藤信・吉田伸之編『都市社会史』(山川出版社、2001年)</p> <p>以上のほか、授業のなかで随時、提示する。</p>		

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
労働経済論		通 期	4 単位	片 岡 洋 子
<b>〔講義概要・学習目標〕</b> これから大学を卒業し、仕事をするようになる人にとって、一番の関心は採用に関する事かもしれません。しかし、採用後の、昇進・昇給、そして退職といった仕事にまつわるイベントがどのように決定されているのかについてこそ興味を持って欲しいと思います。講義は大卒の雇用管理を中心に進めていきます。 現在の日本の雇用管理、中でも報酬に関する側面は激変しており、今後の変化に対応するためにも諸外国の状況も含めて、理解することが学習する上での目標となります。	<b>〔講義計画〕</b> 春学期は、仕事を通じてのキャリア形成や報酬管理がどのように行われているのかなど、雇用管理のあり方を日本と外国の比較を通じて、明らかにしていきます。 秋学期には、女性や中高年といった、労働者グループごとの特質にも話を広げていきます。			
<b>〔成績評価の方法〕</b> 成績は定期試験によって決定します。	<b>〔参考文献〕</b> 『労働経済学』 中馬宏之、樋口美雄著 岩波書店 1997年(2500円)			
<b>〔教科書〕</b> 『仕事の経済学 第2版』 小池和男著 東洋経済新報社 1999年(3200円)				

《 インテグレーション科目 》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
学校図書館論Ⅰ（学校図書館と学校経営）		秋学期	2単位	志 保 田 務
<b>〔講義概要・学習目標〕</b> 学校図書館に関する総論である。学校図書館について総括的に把握するとともに、「司書教諭科目」の基礎科目という視点から学んで行く。「講義計画」に記したよう講義を展開する。	<b>〔講義計画〕</b> 1 学校経営と学校図書館（総説） 2 学校図書館と法規・基準1 3 学校図書館と法規・基準（2） 4 学校図書館の管理運営（1） 5 学校図書館の管理運営（2） 6 学校図書館の管理運営（3） 7 司書教諭、学校司書の働き 8 学校図書館の授業への寄与（1） 9 学校図書館の授業への寄与（2） 10 学校図書館の授業への寄与（3） 11 学校図書館をめぐるネットワーク（1） 12 学校図書館をめぐるネットワーク（2） 13 マトメ（テスト）			
<b>〔成績評価の方法〕</b> テストその他	<b>〔参考文献〕</b> 図書館の指定図書コーナーを見ること。			
<b>〔教科書〕</b> プリントによる。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
学校図書館論Ⅱ（学校図書館メディアの構成）		春 学 期	2 単 位	志保田務
<p>〔講義概要・学習目標〕</p> <p>本科目は、学校図書館法もとの学校図書館司書教諭講習科目「学校図書館メディアの構成」にあたる。次のような概要と学修目標を有する。</p> <p>〈内容〉</p> <p>1) 学校図書館メディアの種類と特性</p> <p>2) 学校図書館メディアの選択と構成</p> <p>3) 学校図書館メディアの組織化</p> <p>資料配列法： 書架分類法：日本十進分類法（NDC） 図書記号法 別置法 資料目録法： 主題目録法 件名法：基本件名目録法（BSH） 書誌分類法 名称による検索：日本目録規則（NCR）1987年版改訂版 著者検索 タイトル検索 キーワード検索 目録の機械化 多様な学修環境と学校図書館メディアの配置</p> <p>〈目標〉</p> <p>1) 学校図書館司書教諭の資格の取得</p> <p>2) それにふさわしい、資料組織化、資料構成に関する知識の取得</p> <p>3) 学校図書館の実務業務に役立つ知識の獲得</p>		<p>〔講義計画〕</p> <p>1 メディアの構成：資料論</p> <p>2 分類</p> <p>3 書架分類</p> <p>4 日本十進分類法 1</p> <p>5 同上 2</p> <p>6 分類法演習 1</p> <p>7 同上 2</p> <p>8 目録法</p> <p>9 同上（タイトル目録）</p> <p>10 同上（著者目録）</p> <p>11 同上（件名目録）</p> <p>12 機械化目録</p> <p>13 多様な学習環境と学校図書館メディア</p>		
<p>〔成績評価の方法〕</p> <p>テスト70% 課題応答20% 出席10%</p>		<p>〔参考文献〕</p> <p>木原通夫〔ほか〕『資料組織法』第5版 第一法規 2002</p> <p>高鷲忠美〔ほか〕『学校図書館メディアの構成』放送大学教育振興会 2000</p>		
<p>〔教科書〕</p> <p>木原通夫、志保田務『分類・目録法入門：メディアの構成』第一法規 新改訂第3版 2002</p> <p>①生協にて一括購入し販売する</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
学校図書館論Ⅲ（学習指導と学校図書館）		春学期	2 単 位	林 陸 雄
<p>〔講義概要・学習目標〕</p> <p>学校図書館の役割は、児童・生徒の読書意欲を高め、各教科の学習指導、調べ学習、総合学習等の学習指導に寄与することにある。そのためには、常に読書ニーズや学習目的を点検し、それに合った図書・資料を選択・収集し、適切に活用できる環境を整える必要がある。さらに、彼らの学習を深め、その結果を発表する能力を育成することも求められている。この講義では、計画的な図書館運営とメディア活用能力育成のための指導について、その基本と実際をとりあげる。</p> <p>授業の展開に当たっては、現場で実践されている先生を、ゲスト講師として適宜お招きする。</p> <p>なお、学校図書館司書の役割と能力は幅広く奥深いものであるから、基礎資格に教員免許を必要とし、教員としての実務経験を10年ほど得ないことには、十全にその役割を遂行し得ないことを充分に認識しておくこと。教員免許と学校司書教諭免許があれば、大学新卒でもその専門職として採用され、直ちにその職務に就くことができるなどと、思いこまないでほしい。</p>		<p>〔講義計画〕</p> <p>1. 授業びらき</p> <p>2. 学校図書館の新しい役割1</p> <p>3. 学校図書館の新しい役割2</p> <p>4. 発達段階と学習指導</p> <p>5. メディア活用能力の育成1</p> <p>6. メディア活用能力の育成2</p> <p>7. メディア活用能力も育成3</p> <p>8. 情報サービス</p> <p>9. レファレンス・サービス</p> <p>10. 情報の収集と提供</p> <p>11. 情報サービスとネットワーク活用</p> <p>12. まとめ（テスト）</p>		
<p>〔成績評価の方法〕</p> <p>出席状況、授業毎の小レポート、ならびに定期試験の結果を総合して評価する。ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>		<p>〔参考文献〕</p> <p>授業中に適宜紹介する。</p>		
<p>〔教科書〕</p> <p>志村尚夫監修 朝比奈大作 編著『学習指導と学校図書館』、樹村房</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー プ
学校図書館論Ⅳ（読書と豊かな人間性）		秋学期	2単位	林 陸 雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>子ども達の豊かな心を醸成するに当たって、読書指導及び読書体験の深化は重要な役割を担っている。</p> <p>この授業では、子どもたちの読書ニーズを涵養し、読書活動を推進・援助し、人間性豊かな醸成に資する学校図書館活動の基本と実際についてとりあげる。授業の展開に当たっては、ゲスト講師を適宜お招きする。</p> <p>なお、学校図書館司書の役割と能力は幅広く奥深いものであるから、基礎資格に教員免許を必要とし、教員としての実務経験を10年ほど得ないことには、十全にその役割を遂行し得ないことを充分に認識しておくこと。教員免許と学校司書教諭免許があれば、大学新卒でもその専門職として採用され、直ちにその職務に就くことができるなどと、思いこまないでほしい。</p>		<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 読書と人間1</li> <li>2. 読書と人間2</li> <li>3. 発達段階と読書</li> <li>4. 中学生と読書</li> <li>5. 読書指導</li> <li>6. 学校図書館の整備と運営</li> <li>7. 読書資料の種類と特性1</li> <li>8. 読書資料の種類と特性2</li> <li>9. 図書館情報と案内</li> <li>10. 地域関連機関との協力</li> <li>11. 読み開かせ、ストーリーテリング</li> <li>12. まとめ（テスト）</li> </ol>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>授業毎の小レポート、定期試験の結果を総合して評価する。</p> <p>ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>		<p>[参考文献]</p> <p>授業中に適宜紹介する。</p>		
<p>[教科書]</p> <p>志村尚夫 監修 赤星 隆子 編著『読書と豊かな人間性』、樹村房</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
視聴覚教育		秋学期	2単位	冷 水 啓 子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>情報化社会の進展に伴って、人々を取りまく教育・社会的環境が急速に変化しつつある。家庭、学校、地域社会において、ケーブル・テレビ、衛星放送、字幕番組などの普及により、テレビ利用の選択肢がさらに広がった。また、さまざまな電子メディアが導入され、日常的にそれらに接する機会が増えた。コンピュータ・ネットワークやインターネットを通じて、情報の検索や受信を行うだけでなく、情報発信さえも容易にできるようになり、時間や空間を越えた幅広いコミュニケーション活動が可能となった。そのため、このような視聴覚メディアを媒介として情報を適切に理解し、利用し、産出する能力（マルチメディア・リテラシー、情報活用能力、情報倫理など）の育成が、新たな教育課題として重要視されるようになった。</p> <p>そこで、この「視聴覚教育」では、「視聴覚教育とメディア」に焦点を絞り、視聴覚教育メディアの発展と特徴、それらを活用した学習支援の方法を検討する。さらに、それらの利用に際する問題点およびその教育的可能性と限界についても考察を行う。具体的には、はじめに講義中心の授業を行い、つぎにコンピュータ実習（電子メールやインターネット、文章作成ソフトや表計算ソフトなどの利用）およびプレゼンテーション教材の作成を行う。</p> <p>なお、授業に関連する資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などを通じて適宜提供する。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。</p>		<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視聴覚教育および視聴覚教育メディアの変遷             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 視聴覚教育および視聴覚教育メディアとは何か</li> <li>2) 活字・印刷物の利用：テキスト、絵本、児童書など</li> <li>3) テレビとビデオの利用：その利用形態と社会・教育的役割                 <ol style="list-style-type: none"> <li>①幼児教育番組</li> <li>②字幕や手話通訳つき番組</li> <li>③子どもの発達や健康への影響</li> </ol> </li> </ol> </li> <li>2. コンピュータの発展と教育利用（コンピュータ実習を含む）             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) コンピュータ・ゲーム：子どもの発達と学習への影響</li> <li>2) コンピュータの教育利用：CAI、CMI</li> <li>3) 電子メールやインターネットの利用</li> <li>4) コンピュータ・リテラシーや情報活用能力の育成</li> <li>5) コンピュータ利用をめぐる教育・社会的諸問題</li> </ol> </li> <li>3. 視聴覚教育メディアの活用：プレゼンテーション教材の作成</li> </ol> <p>〔但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある〕</p>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席および授業への参加を重視する（原則として1/3以上の欠席は認めない）。学期中、必要に応じて簡単なレポート課題を与える。学期末には、作成したプレゼンテーション教材および修了レポートの提出を求める。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。</p>		<p>[参考文献]</p> <p>情報教育学研究会 他（編）『インターネットの光と影』（北大路書房） 水越敏行・佐伯胖（編）『変わるメディアと教育のありかた』（ミネルヴァ書房） 永田元康 他（著）『情報教育概論』（コロナ社） 中島義明（著）『映像の心理学—マルチメディアの基礎—』（サイエンス社） （財）日本視聴覚教材センター（編）『視聴覚教材メディアの活用』 野津良夫（編）『視聴覚教育の新しい展開（第2版改訂版）』（東信堂） 高島秀之（編）『教育とデジタル革命』（有斐閣選書）</p>		
<p>[教科書]</p> <p>追って指示する</p>				他

資格  
02~

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
生涯学習概論	01 02	春学期 秋学期	2単位 2単位	伊藤正純
<b>〔講義概要・学習目標〕</b> <p>日本でも生涯学習は当たり前の言葉となってきたが、しかし、政府および地方自治体は普及をはかっている割には、人々に浸透しているようには思えない。生涯教育・生涯学習は1960年代、70年代にユネスコ、OECDなどの国際機関が提唱したものである。それは急速な技術革新と高齢化の進展に対応して、勤労成人を含めてすべての人々に学習機会を保障する必要があるからである。生涯学習の普及にとって最大のネックは時間である。その意味でも、ILOが勧告した有給教育休暇制度を導入しないうかぎり、日本の生涯学習はいつまでたっても中途半端で終わるだろう。本講義では、生涯学習大国・スウェーデンと比較しながら、日本の生涯学習の現状を紹介し、考えたい。</p>	<b>〔講義計画〕</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生涯学習とは何か ユネスコの生涯教育論、OECDのリカレント教育論 ILOの有給教育休暇勧告</li> <li>2. 生涯学習の国・スウェーデンでの実験 労働市場プログラム、リカレント教育、コミュニケーション成人教育、国民高等学校、高い成人学生の割合、学生ローン制度、教育休暇制度、成人教育奨学金制度、学習サークル</li> <li>3. 日本の「生涯学習社会」とその現状 (1) 随教審査申、生涯学習振興法 (2) 地方自治体の取り組み(市民大学など) (3) 大学改革、高校改革、生涯学習機関としての学校 コンソーシアムなど</li> </ol>			
<b>〔成績評価の方法〕</b> <p>司書および学芸員の資格取得科目でもあるので、出席を重視する。毎回、授業の感想を書いてもらう。評価は8割をこの感想文で、2割を期末の試験で行う。なお、20分を超えた遅刻は認めない。</p>	<b>〔参考文献〕</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒沢惟昭他編『苦悩する先進国の生涯学習』社会評論社</li> <li>2. 赤尾勝己『生涯学習概論』関西大学出版部</li> <li>3. 倉橋史郎・鈴木真理編『生涯学習の基礎』学文社</li> <li>4. 森岡孝二他編『21世紀の経済社会を構想する』桜井書店</li> </ol>			
<b>〔教科書〕</b> <p>使用しない。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図書館通論		春学期	2単位	志保田 務
<b>〔講義概要・学習目標〕</b> <p>図書館、図書館情報学のおおよそについて平易に概説する。まず、図書館は何をすることで把握し、その果たす役割について考える。そこで情報と図書館の関係、社会と図書館の関係、生涯学習社会について検討する。次に図書館を構成する要素を確かめる。図書館の要素は、図書→資料→情報、館(建物)→図書館システム、図書館員→司書(専門職員)→利用者(住民)の4点に分かれるが、本講義では、利用者(住民)および図書館システムに焦点をおく。そこでは図書館サービスが追究の対象となる。各種の館種のうちここでは公共図書館を中心に論じる。また、「図書館の自由」や図書館経営、図書館の情報化、図書館世界の将来等について検討する。</p>	<b>〔講義計画〕</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 図書館とはなにか</li> <li>2. 図書館の果たす役割</li> <li>3. 情報の伝達と図書館</li> <li>4. 社会、生涯学習と図書館</li> <li>5. 図書館の構成要素</li> <li>6. 図書館の種類(館種)</li> <li>7. 公共図書館：理念</li> <li>8. 公共図書館の歴史と現代</li> <li>9. 公共図書館の利用者</li> <li>10. 図書館の自由</li> <li>11. 図書館経営</li> <li>12. 図書館と情報化</li> <li>13. 図書館の将来。テスト</li> </ol>			
<b>〔成績評価の方法〕</b> <p>テスト80% レポート 20%</p>	<b>〔参考文献〕</b>			
<b>〔教科書〕</b> 志保田務編著『図書館概論』(樹村房)				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図書館経営論		秋学期	2 単位	西 田 文 男
<b>[講義概要・学習目標]</b> 生涯学習社会における図書館という視点を重視して、図書館経営にかかわる組織、管理・運営、各種計画について解説する。	<b>[講義計画]</b> 1. 図書館経営の在り方 2. 自治体行政と図書館（他部局等との関係を含む） 3. 図書館の組織と管理・運営 4. 図書館長・図書館員の責務及び養成・研修（ボランティアの養成・活用を含む） 5. 図書館サービス計画の意義と方法（各種調査、広報を含む） 6. 図書館の整備計画と施設、設備、備品 7. 図書館業務・サービスの評価 8. 情報ネットワーク形成の意義と方法（類縁機関等との連携を含む）			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験の成績を主に、出席状況も加味して評価する。	<b>[参考文献]</b> その都度指示する。			
<b>[教科書]</b> 竹内紀吉「図書館経営論」 教育史料出版会（新編 図書館学教育資料集成 2）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図書館サービス論		春学期	2 単位	西 田 文 男
<b>[講義概要・学習目標]</b> 利用者と直接係わる図書館サービスの意義、特質、方法について解説するとともに各種サービスの特質を明らかにする。	<b>[講義計画]</b> 1. 図書館サービスの意義と種類（貸出、読書案内、情報サービス、利用者援助、教育・文化活動など） 2. 利用者理解と利用対象別サービス（多分化サービスを含む） 3. 図書館サービスと著作権 4. 図書館サービスとボランティア 5. 図書館サービスの協力（他の図書館、関連機関との連携・協力等）			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験の成績を主に、出席状況も加味して評価する。	<b>[参考文献]</b> その都度指示する。			
<b>[教科書]</b> 塩見 昇「図書館サービス論」 教育史料出版会（新編 図書館学教育資料集成				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報サービス概説		春学期	2 単位	西 田 文 男
<b>[講義概要・学習目標]</b> 図書館における情報サービスの意義を明らかにし、レファレンスサービス、情報検索サービス等について総合的に解説する。	<b>[講義計画]</b> 1. 情報サービス一般の広がりとは図書館が行う情報サービスの位置づけ 2. 図書館における情報サービスの意義と種類（レファレンスサービス、レファラルサービス、カルトアウェアネスサービス等） 3. 情報及び情報検索行動についての基本的理解 4. レファレンスプロセス（レファレンス質問の受付から回答まで、マニュアル検索とコンピュータ検索を含む） 5. 情報検索サービスの方法、プロセス・評価 6. 主要な参考図書、データベースの解説と評価 7. 参考図書及びその他の情報源の組織（二次資料の作成にも触れる） 8. 各種情報源の特質と利用法			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験の成績を主に、出席状況も加味して評価する。	<b>[参考文献]</b> その都度指示する。			
<b>[教科書]</b> 西田文男監修 志保田 務・平井尊士編著 「情報サービス：概説とレファレンスサービス演習」 学芸図書				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報サービス演習		秋学期	1 単位	西 田 文 男
<b>[演習概要・学習目標]</b> 参考図書その他の情報源の利用や作成、レファレンス質問の回答処理の演習を通して、実践的な能力の養成を図る	<b>[演習計画]</b> タイプの異なる各種の演習問題を課し、回答を作成してもらう。 1. 図書に関する質問 2. 逐次刊行物に関する質問 3. ことばと成句に関する質問 4. ものとことがらに関する質問 5. 時と歴史に関する質問 6. ところと地理に関する質問 7. ひとと機関に関する質問 8. 総合質問			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験の成績を主に、出席状況・日常の発表等を加味して評価する。	<b>[参考文献]</b> その都度指示する。			
<b>[教科書]</b> 西田文男監修 志保田 務・平井尊士編著 「情報サービス：概説とレファレンスサービス演習」 学芸図書				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
情報検索演習	01	春学期	1単位	志保田務
<p><b>[演習概要・学習目標]</b>                      図書館が、オンライン、オンデスクのデータベースに利用者のために接続するサービスは、今日必須のこととなっている。このサービスの専門家は、図書館の外の世界ではサーチャー（インフォメーション・サーチャー）と呼ばれる。ここでは、1級、2級と高位の資格であるサーチャーへの登竜門となる情報検索基礎能力試験を目線において学修する。                      各分野の専門家によるインテグレーション授業とし、大半はA館のコンピュータ演習室を使用する。                      この授業の受講を始めるには、第1回講義までに、次の条件を満たしておくこと。                      1 E-MAIL Addressを取得しておくこと（学内LANのそれでよい）                      2 パソコンキーボードの操作、入力ができること。</p>	<p><b>[演習計画]</b>                      1. ガイダンス 情報利用社会                      2. 情報検索概論（情報検索と情報処理の違い）                      3. 情報検索の基本1（主題分析、分類、キーワード、一次情報と二次情報）                      4. 情報検索の基本2（検索式、検索コマンド）                      5. 情報検索の実際1（図書、雑誌）                      6. 情報検索の実際2（新聞記事、雑誌記事）                      7. 情報検索の実際3（企業、人物）日本                      8. 情報検索の実際4（企業、人物）外国                      9. 情報検索の実際5（生活、趣味、その他）                      10. 特許情報                      11. 情報検索と英語                      12. 情報検索の企業での役割                      期末レポート</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b>                      テスト 70% 課題 20%                      出席 10%</p>	<p><b>[参考文献]</b>                      志保田務編著『情報機器論・特論：メディアの活用』（第一法規）                      『最新オンライン情報源活用法』（日外アソシエーツ）</p>			
<p><b>[教科書]</b>                      『情報の管理と検索』（情報科学技術協会）2000（2000円）                      ①. 生協にて一括購入し販売する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報検索演習	02 03	春学期 秋学期	1単位 1単位	中 崎 修 一
<p><b>[演習概要・学習目標]</b>                      現在、多様化した情報資源を活用する能力は必須となっている。特に、ネットワークを利用することで、場所を移動することなく、世界中の様々な情報源から必要な情報を瞬時に収集できるようになった。                      本演習では、情報の読み方や多種多様な情報の検索を通じて、情報源の調査、情報収集の手法と多様化した情報源へのアクセス法の習得を図ると同時に、実践的な技術の習得を図ることを目的とする。                      レポート提出および連絡を電子メールで行うため、基本的なパソコンおよび電子メールの利用を習得していることを前提とする。</p>	<p><b>[演習計画]</b>                      1. 情報化社会と情報メディア                      2. 情報検索概説                      3. 一時情報と二次情報                      4. データベース基礎                      5. 情報検索の論理                      6. インターネットと情報検索                      7. 情報検索の実際：図書情報                      8. 情報検索の実際：雑誌情報                      9. 情報検索の実際：新聞情報                      10. 情報検索の実際：学術情報                      11. 情報検索の実際：その他                      12. まとめ</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b>                      課題提出、筆記試験、出席から総合的に判断する</p>	<p><b>[参考文献]</b>                      志保田務・平井尊士編著『情報機器論・特論：メディアの活用 12章』（第一法規）</p>			
<p><b>[教科書]</b>                      志保田務・平井尊士・中崎修一編著『情報活用術：情報検索・情報処理の楽々実行―サーチャ・システムアドミニストレータへの入門路―』（学芸図書）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図書館資料論		秋学期	2単位	志保田 務
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>図書館を構成する要素のうち、最も特徴的な要素、図書館資料について抗議する。図書を中心に、各種の資料について検討する。特に資料の電子化に注目する。電子ブック、電子図書館、インターネット等に言及する。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 図書館資料論</li> <li>2. 図書館資料の種類</li> <li>3. 資料の生産と流通</li> <li>4. 資料の選択</li> <li>5. 資料選択論</li> <li>6. 図書館の自由</li> <li>7. 電子資料、電子情報</li> <li>8. ネットワーク</li> <li>9. インターネット</li> <li>10. 著作権</li> <li>11. 公共貸与権</li> <li>12. まとめ</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>テスト80% 課題 20%</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p> <p>志保田務・山本順一監修著『資料・メディア総論－図書館資料論・専門資料論・資料特論の統合化』（学芸図書） 2001</p> <p>①. 生協にて一括購入し販売する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
専門資料論		春学期	2単位	宮本 孝二
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>この講義では、人文科学、社会科学、自然科学の各専門分野に属する専門主題別に、専門資料の特性や、その分野と主題の知識構造について説明し、さらに、それら専門資料に関する書誌や索引など、専門資料を探索するのに不可欠なツール（道具）について、それらの特性と活用法を明らかにする。なお、高度情報化の進展に伴い、情報量は爆発的に増加し、情報アクセスのツールであるコンピュータや電信技術も急速に発展しているため、オンラインやCD-ROMによる専門情報アクセスについても解説したい。</p> <p>図書館専門職員が十分にその役割を果たすためには、諸科学の専門諸分野、専門諸主題の概要と、それらに関する専門資料の特性を正確に理解し、専門資料を適切かつ迅速に検索し情報を提供する方法を習得しておくことは不可欠であることを自覚し、真剣に受講していただきたい。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 専門資料の概要と情報アクセス 専門資料と図書館、専門資料の意義と内外での現況、専門資料の書誌・索引類と専門資料への情報アクセス</li> <li>2 人文科学資料の特性と情報アクセス 人文科学資料の特性、人文科学資料の書誌・参考図書、人文科学資料への情報アクセス</li> <li>3 社会科学資料の特性と情報アクセス 社会科学資料の特性、社会科学資料の書誌・参考図書、社会科学資料への情報アクセス</li> <li>4 科学技術資料の特性と情報アクセス 科学技術資料の特性、科学技術資料の書誌・参考図書、科学技術資料への情報アクセス</li> </ol> <p>以上の内容を、13回ないし14回で、テキストをもとに講義する。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>春学期期末試験の結果によって評価する。ただし、毎回出席を義務付け、出席点が低い受講生には受験を認めない。なお、欠席者には欠席日の講義内容（テキスト該当部分）についてのレポートが課せられる。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>その都度指示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>中森強編著『専門資料論』（新現代図書館学講座9） 1999年、東京書籍</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料目録法		春学期	2 単位	北 克 一
<b>【講義概要・学習目標】</b>  図書館は資料・情報を収集・整理・保存し、提供する社会的記憶装置である。図書館活動を基礎で支える資料・情報の組織化について、その意義の理解を進め、実務で用いるツール等の基礎知識を獲得することを目的とする。	<b>【講義計画】</b>  1. 書誌コントロールと資料組織化の目的と意義、歴史 2. 目録の機能、目録規則の構成原理、その適用。 3. 典拠コントロールの目的と機能 4. 書誌データと典拠ファイル 5. キーワード検索と全文検索 6. 機械化、総合目録、インターライブラリー・ローンへの展開 7. 電子ジャーナル、電子図書館とメタデータ 8. まとめ			
<b>【成績評価の方法】</b>  期末テストおよび小レポート	<b>【参考文献】</b>  宮澤彰『書誌ユーティリティ』丸善、2002。 井上如「ほか」著『学術情報サービス—21世紀への展望—』丸善、2000。			
<b>【教科書】</b>  志保田務・高鷲忠美『資料組織法』第5版 第一法規出版 2002				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料分類法		春学期	2 単位	上 田 格
<b>【講義概要・学習目標】</b>  図書館には膨大な蔵書が蓄積されている。その中から必要な図書を迅速に、かつ効率よく見つけ出し利用に供するには、蔵書が一定の法則にしたがって排架されていることが必要である。  また、特定の主題に関する図書を目録から検索する場合にも、その理論と方法の理解があれば、主題検索の技術は飛躍的に向上する。本講義では、以上の主題検索の基礎である分類法、件名法の概要を説明する。	<b>【講義計画】</b>  1. 資料組織化の意義 2. 書架分類と書誌分類 3. 分類の原理 4. 図書分類の歴史と主要な分類表 5. 日本十進分類法：概要 6. 日本十進分類法：補助表の種類 7. 図書館分類における主題の把握法 8. 分類作業 9. 図書の排架法（別置法と図書記号法） 10. 件名法 11. 件名標目と自然語			
<b>【成績評価の方法】</b>  出席状況とテストの成績で評価する。	<b>【参考文献】</b>  千賀正之著『図書分類の実務とその基礎 改訂版』（日本図書館協会）			
<b>【教科書】</b>  木原通夫ほか著『資料組織法 最新版』（第一法規出版）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料目録法演習	01 02	秋学期 秋学期	1単位 1単位	北 克 一
<b>[演習概要・学習目標]</b>  資料目録法で学習した目録規則、典拠コントロールなどを目録作成の演習を通して、目録に対する理解・経験を深めることを目的とする。実際に書誌ユーティリティを使用し、書誌データベース構築を基礎演習する。 各自の演習データ保存用にフロッピーディスク(3.5インチ/2HD)を持参のこと。	<b>[演習計画]</b>  1. 書誌ユーティリティのシステムと参加図書館の役割 2. 書誌レコード、典拠レコードの検索演習 3. 和図書所蔵登録、流用入力、新規入力演習 4. 洋図書所蔵登録、流用入力、新規入力演習 5. 和雑誌所蔵登録演習、洋雑誌所蔵登録演習 6. 典拠コントロール演習 7. 遡及入力とカード目録 8. OPAC構築演習 9. まとめ			
<b>[成績評価の方法]</b>  演習課題レポートおよび理解度小テスト	<b>[参考文献]</b>  図書館情報学会研究委員会編『電子図書館』勉誠社、2001。			
<b>[教科書]</b>  北 克一著『資料組織演習－書誌ユーティリティ、コンピュータ目録－』 改訂新版 M. B. A. 2000				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料分類法演習		秋学期	1単位	上 田 格
<b>[演習概要・学習目標]</b>  前期で学んだ分類法について、日本の図書館界に広く普及している日本十進分類法(NDC)を適用して、実際分類作業を演習する。 授業時間内に 何回かペーパーの演習問題を課するので、各自で解答してペーパーを提出してもらおう。(欠席が多くなると極めて不利になる) ペーパー提出の次回には 各自の解答について講評し 分類作業の理解を深める。	<b>[演習計画]</b>  1. 主題分析と主題把握 2. NDCによる分類作業 ①NDCの構成 3. " ②形式区分 4. " ③地理区分 5. " ④言語区分・言語共通区分 6. " ⑤文学共通区分 7. " ⑥特殊分類規程 8. " ⑦伝記資料 9. " ⑧総合問題 10. " ⑨総合問題			
<b>[成績評価の方法]</b>  授業時に行う演習問題の解答と、出席状況とで評価する。	<b>[参考文献]</b>  『日本十進分類法 第9版』(日本図書館協会) 千賀正之著『図書分類の実務とその基礎 改訂版』(日本図書館協会)			
<b>[教科書]</b>  演習問題はプリントを用意する。 木原通夫ほか著『資料組織法 最新版』(第一法規出版)				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
児童サービス論		春学期	2 単位	清 水 昭 治
<b>[講義概要・学習目標]</b> この科目は、図書館における“児童サービス論”です。図書館、特に公共図書館では、中学生までのサービスを児童サービスと考えられており、赤ちゃん・幼児向けの絵本から、小学生・中学生までの中広い本が準備されています。まず、この現実を学びます。少子化時代に入り、絶対数の子供の減少と共に、社会的事件の中の子供達が注目されています。子供達の成長にとって、読書がいかに必要か、その読書を土壌とする児童サービスの重要性を考えます。生涯教育が求められる中で、図書館の必要性は、ますます増大します。その時、図書館利用の習慣化されることは大切で、その習慣化の第一歩が図書館における児童サービスなのです。	<b>[講義計画]</b> 講義と共に、具体的に、実際に、多量に出版されている子供の本を紹介しながら、又、「読みかきせ」などを通して、子供の本を楽しみながら、講義をすすめます。 又、ビデオ・スライドなどを利用しながら、具体的な子供の図書館の姿を学びます。			
<b>[成績評価の方法]</b> レポート、又は、学年末試験に代えて、出席状況、平常成績とを総合評価します。	<b>[参考文献]</b> 参考文献は、講義の中で、お知らせしますが、まずは、文献よりも実際の図書館の児童室、あるいは、児童コーナーを体験しておいてください。 1は1めは、少し、躊躇しますが、一度、体験すれば、一般向の図書館と同じように利用できることと思います。			
<b>[教科書]</b>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図書及び図書館の歴史		秋学期	2 単位	上 田 格
<b>[講義概要・学習目標]</b> 人類の体外記憶媒体である図書は、依然として図書館資料の中心位置を占めている。その図書の歴史の変遷をたどり、最新の電子資料にいたる歩みを概説する。 次に、図書をはじめとする各種のメディアの保存・提供の場所であった図書館が、一部特権階級の人たちの占有物であった時代から、広く一般民衆に開放されるまでの、思想的・制度的変遷の経過をわかりやすく講義する。	<b>[講義計画]</b> 1. 記録の誕生と図書の歴史 2. 印刷の歴史 3. 非図書の出現 4. 古代の図書館 5. 中世の図書館 6. 近世の図書館 7. 近代図書館の先駆け 8. 近代公共図書館の誕生 9. 日本の近代図書館の歩み 10. 日本の近代図書館の歩み 続			
<b>[成績評価の方法]</b> 定期試験（筆記）を行って評価する。	<b>[参考文献]</b> 『図書館 その本質・歴史・思潮』増補版 岡田 温著 丸善 『近代図書館の歩み』森 耕一著 至誠堂 『図書館の歴史 アメリカ編』増訂版 川崎良孝著 日本図書館協会 (図書館員選書 31)			
<b>[教科書]</b> 『図書館の話』森 耕一著 至誠堂 (至誠堂選書)				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー プ
資料特論		秋学期	2 単位	藤間 真
[講義概要・学習目標] 行政資料、郷土資料、および視聴覚資料に注目し、それぞれの特徴、収集、利用等について解説する。それぞれの専門の研究者によって講義が行われる。	[講義計画] ・はじめに ・行政資料について ・情報公開制度について ・公文書館について ・視聴覚資料について ・CD-ROMの利用 ・郷土資料について ・まとめ			
[成績評価の方法] 講師それぞれの評価(テストまたはレポート)を総合して評価する。	[参考文献]			
[教科書]				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報機器論		秋学期	2 単位	藤間 真
[講義概要・学習目標] 近年の図書館は、単なる紙の集積ではない。色々な情報機器によって装備されている。そのことは、本学の図書館に1歩入って周りを見渡すだけでわかるであろう。言い換えると、情報機器に関する知識はこれからの司書にとって不可欠の知識である。  本講の目的は図書館における情報機器に関する基本的な知識の修得である。単なる現状追認に終わらず、司書としての人生に役立つよう本質的な理解を目指す。 具体的な計画は右欄の通りであるが、コンピュータの世界の変化と講義の進展の状態に応じて変更することもありうる。	[講義計画] ・本講義で要求するレポートのレベルについて ・情報を機械で扱うとは ・図書館学の五法則と情報機器 ・図書館で使われる情報機器 ・情報処理システムの基礎知識 ・パソコンの基礎知識 ・視聴覚機器とプレゼンテーション			
[成績評価の方法] 学期末レポートを主に、平常成績を加味し総合的に判断する。	[参考文献] 進行状況に応じて指示する。 尚、講義に必帯とはしないが、 志保田務・平井尊士 編著 図書館と情報機器・特論：情報メディアの活用 第一法規 に目を通すことは要求する。			
[教科書]				



《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
図書館特論		秋学期	2単位	志保田務
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>— 図書館の諸問題 —</p> <p>図書館に関する諸現象をとらえ考察する。現代社会のなかで生じる図書館に関する問題点を追うので、都度新鮮な問題を扱うが、新年度前において立てた企画を講義計画欄に記しておく。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 図書館現象について</li> <li>2. 教育と図書館</li> <li>3. 市民と図書館</li> <li>4. 図書館学論</li> <li>5. 図書館の施設と設備</li> <li>6. 図書館の機械化</li> <li>7. 図書館とネットワーク</li> <li>8. 図書館とインターネット利用</li> <li>9. 電子図書館</li> <li>10. IT化、ビジネス図書館</li> <li>11. 図書館と著作権</li> <li>12. 公共貸与権</li> <li>13. 図書館評価：パフォーマンス指標</li> <li>14. まとめ（テスト）</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>テスト 70% 課題 20%</p> <p>出席 10%</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p> <p>後で指示する</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館概論		春学期	2単位	井上 敏
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>学芸員資格課程の基幹科目である。最初の授業で、学芸員課程の諸科目で何を学ぶのか、この「概論」の目的はなにかについて、見取り図を提供する。この授業で、博物館に関する最も基礎的な知識を学ぶ。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館の目的と機能</li> <li>2. 博物館の歴史</li> <li>3. 博物館の現状</li> <li>4. 博物館倫理</li> <li>5. 博物館関係法規</li> <li>6. 生涯学習と博物館</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>平常点、レポート、およびテストを総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p> <p>広瀬隆人（編）『博物館学基礎資料』樹村房(2001年)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館学各論Ⅰ		春学期	2単位	水 口 薫
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年、博物館及び博物館相当施設が増え、社会におけるその機能、役割が注目されてきている。特に生涯学習、学校教育、研究活動において、その領域は拡大し、その必要性と相まって博物館への関心は高くなっている。新しい博物館像が模索される中でも、学芸員は博物館の基本機能である資料収集、保存、研究、教育・普及活動の知識と活用する能力が求められている。</p> <p>本講義では、博物館学芸員が身につける「博物館資料論」を内容とする。</p> <p>博物館学芸員が身につける博物館機能の構成要因の一つである博物館資料の収集・保管・展示等についての基礎知識の習得、調査・研究、教育・普及活動及び情報の意義と活用方法についての理解を図る。</p> <p>適時ビデオ資料を使用する。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>「博物館資料論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館とは何か 博物館資料の概念</li> <li>2. 博物館資料の種類と特質</li> <li>3. 博物館資料の収集・調査と整理</li> <li>4. 博物館活動と資料情報</li> <li>5. 博物館資料の取り扱い方と製作</li> <li>6. 博物館資料の保存と劣化対策</li> <li>7. 虫菌害と防除対策</li> <li>8. 博物館資料の利用</li> <li>9. 展示の実際1 展示と環境・条件</li> <li>10. 展示の実際2 展示方法と照明</li> <li>11. 展示会の企画と開催</li> <li>12. 博物館の危機管理と地震対策</li> <li>13. 資料論からみた博物館</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席を兼ねた小テスト（適時）、定期試験と出席点にて総合評価</p>	<p>[参考文献]</p> <p>『博物館学教程』大堀哲編（東京堂出版） 『博物館学概説』網干善教編（関西大出版部）</p> <p>その他、講義の時に提示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>「博物館ハンドブック」（雄山閣）加藤有次、椎名仙卓（編）</p> <p>適時、プリントを配布。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館学各論Ⅱ		秋学期	2単位	水 口 薫
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年ミュージアム・マネージメントという研究活動領域が拡大している。生涯学習の必要性と相まって博物館への関心は高く、博物館でも教育・福祉・援助・環境保護などあらゆることにマネージメント感覚が求められている。</p> <p>本講義では、博物館学芸員が身につける「博物館経営論」「博物館情報論」を内容とする。</p> <p>博物館学芸員が身につける博物館機能の構成要因の一つである博物館経営、教育・普及活動及び情報の意義と活用方法についての理解を図る。</p> <p>適時ビデオ資料を使用する。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>「博物館経営論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館の行財政</li> <li>2. 博物館経営の理念と方法（ミュージアム・マネージメント）</li> <li>3. 博物館の組織と職員及び施設・設備</li> <li>4. 博物館と利用者、地域社会との関係</li> <li>5. 博物館における教育普及活動の意義と方法</li> <li>6. 博物館における市民参加とボランティア 博物館友の会・後援会</li> <li>7. 博物館の出版活動</li> <li>8. 博物館の広報活動</li> </ol> <p>「博物館情報論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9. 博物館における情報の意義</li> <li>10. 博物館における情報提供と活用の方法</li> <li>11. 博物館における情報機器とその利用</li> <li>12. 情報発信機関としての博物館</li> <li>13. 博物館の教育・普及活動における資料と情報</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席を兼ねた小テスト（適時）、定期試験と出席点にて総合評価</p>	<p>[参考文献]</p> <p>「ミュージアム・マネージメント 博物館運営の方法と実践」（東京堂出版） 大堀哲、小林達雄、端信行、諸岡博熊（編）</p> <p>その他、講義の時に提示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>「博物館ハンドブック」（雄山閣）加藤有次、椎名仙卓（編）</p> <p>適時、プリントを配布。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
産業社会学		春学期集中	4 単位	上田 修
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>「失われた10年」という言葉に象徴されるように、わが国は長期にわたる経済不況に喘いでいる。この過程で、1980年代は国際的に高く評価されていた日本企業の経営システムも金融関連産業を中心として批判を浴び、改革の対象とされている。金融不安はいうまでもなく、リストラ、企業倒産による失業者の増大、さらにグローバルスタンダードのかけ声と共に、かつて日本的と称され、良好な国際的パフォーマンスの一因とみなされた制度、特徴に対する信頼は揺るぎ、評価の大幅な低下に結びついている。</p> <p>しかし、戦後の時期に限っても、日本企業の雇用・人事管理をはじめとする様々な特徴・特質に対する評価は、時期によって大きく変化してきた。この点を念頭におき、この授業では、日本企業が採用する雇用・人事・労務管理制度の特徴をアメリカ、ヨーロッパの企業と比較しながら検討するとともに、いかにこれらが変化してきたのかを明らかにする。同時に、これらの日本の特質とされる事柄が働く人々の生活や社会関係にどのような問題を投げかけているのかを考察する。</p>		<p><b>[講義計画]</b></p> <p>I 総論</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 日本企業をめぐる評価とその変遷</li> <li>2 日本的特質と実態</li> </ol> <p>II 制度と政策の歴史的展開</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 労務管理：年功制から能力主義へ</li> <li>2 人事管理：伝統的管理と能力主義</li> <li>3 雇用管理：終身雇用の動揺と多様化する雇用</li> <li>4 賃金：平等と格差</li> </ol> <p>III 変わる労働世界</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 労働市場の変容と労働政策の転換</li> <li>2 女性労働の増大：均等法と女性の労働世界</li> <li>3 ホワイトカラーの労働と管理</li> <li>4 企業社会の変容？</li> </ol>		
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>学期末試験の成績で評価する。</p>		<p><b>[参考文献]</b></p> <p>各講義概要(レジュメ)で指示する。</p>		
<p><b>[教科書]</b></p> <p>使用しない。ただし、各パートに入る時、講義内容の概略(レジュメ)を配布する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本文化史		春学期集中	4 単位	梅 山 秀 幸
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>英語で豚を pig というからには、豚肉は pig meat といえはすむはずである。しかし、そうはいわずに、pork という。これはフランス語の porc から来ている。同じように、牛を cow というから、牛肉は cow meat でいいはずなのに、わざわざ beef といわなくてはならない。これもまた、フランス語の boeuf から来ている。料理(文化)はフランスからというわけだ。11世紀にフランスのノルマンジー公爵のギヨーム(ウイリアム)がイギリスの王様になって以来、アングロ・サクソンの言葉にフランス語の言葉が混交して、現在の英語が成立したといわれる。日本には従来の「やまとことば」があり、そこに漢語が混ざり合って、表現を豊かにした。漢語が使われていない文章は、現在では考えられないが、しかし、日本文学の最高の傑作である『源氏物語』は、基本的には「やまとことば」の文学であり、さらに三十一文字のやまとことばのみを使った短詩型の文学が現在まで連続と作られてきた。文学を通して日本語、日本文化について考えたい。お隣の韓国の文学とも比較してみたい。</p>		<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、英語の場合『アイヴァンホー』を読むー</li> <li>2、日本語の成り立ちーアイヌ語と縄文語ー</li> <li>3、やまとことばと漢語</li> <li>4、『伊勢物語』ー「みやび」の文化ー</li> <li>5、『枕草子』ー「をかし」の文化ー</li> <li>6、『源氏物語』ー「もののあはれ」の文化ー</li> <li>7、「漢才」と「やまとだまししい」</li> <li>8、琉球ー「おもろ」の世界ー</li> <li>9、朝鮮宮廷小説ー「ハン(恨)」の文化ー</li> <li>10、『於千野譚』の語る壬辰・丁酉の乱(文禄・慶長の役)</li> </ol>		
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>試験による</p>		<p><b>[参考文献]</b></p> <p>梅山秀幸編訳『ハンのものがたり』(総和社)          梅山秀幸著『かぐや姫の光と影』(人文書院)          # 『後宮の物語』(丸善出版部)</p>		
<p><b>[教科書]</b></p> <p>なし</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
言語学概論		通 期	4 単位	大 石 正 晴
<b>[講義概要・学習目標]</b> 言語の使用は人間生活の中で最も基本的かつ欠くことの出来ない営みである。人間どうしのコミュニケーションの道具であるだけでなく、存在の認識、理解、記録、伝達等について他の動物とは全く異なる機能を果たすものである。言語なしに人間の生活は成り立ち得ないことは明らかである。 ところが、これほど重要な言語の本質が十分理解されずに、あまりにも自明のこととして使用されているため、言語がもつ究極的な曖昧さ・不便さに気がつかず、この点から生じる認識やコミュニケーションの不確かさ、不十分さの問題を数多く残したまま生活が行われている。 本講義は、言語の本質的な姿と問題点、及び人間生活に果たす役割を根底から見直し、欠点を浮き彫りにしながら、より良い言語生活を行う道を探らうとするものである。	<b>[講義計画]</b> 次の諸問題について考察する。 1. 言語とはどういうものか 2. 言語研究の流れ 3. 言語の内部構造 — 音声・語・文・意味等 4. 言語使用の問題 — 人間がお互いに伝達し合う時に守る一般原則・手段等 5. 言語をとりまく外側の諸要素 — 言語と社会・言語と心・言語の変化等			
<b>[成績評価の方法]</b> 試験と講義への出席度による	<b>[参考文献]</b> 講義で適宜紹介する			
<b>[教科書]</b> 「入門言語学」 ジーン・エイチソン 著 田中春美／田中幸子／若月 剛 訳 金星堂				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
応用言語学		秋学期集中	4 単位	橋 内 武
<b>[講義概要・学習目標]</b> 応用言語学は、1940年代後半から50年代前半にかけて言語学の真言語教育への応用として成立したが、現在では学際的言語学として言語学と隣接科学の中間領域に位置づけられている。その他に、言語問題の学という立場や「ことばの職業」研究であるという立場もあり、一筋縄ではいかないのが、応用言語学である。本講では、これら4つの応用言語学についての基本事項を講ずることをもって応用言語学への誘いとする。履修者にことばの多面性に気付いてもらい、将来日本語教師や言語聴覚士などのことばの職業に就くために必要なことばに対する見方を養ってもらおうことが、学習目標となる。	<b>[講義計画]</b> 1. 応用言語学とは何か — 課題と方法 2. 言語問題の学 — 言語障害、言語の消滅、ことばの乱れ、誤訳 3. 真言語教育学 — 教授法、教師・学習者、教材、辞書、評価 4. 学際的言語学 — 神経言語学、心理言語学、人類言語学、社会言語学、法言語学、経済言語学など 5. 「ことばの職業」研究 — 日本語教師、言語聴覚士、通訳英語教員			
<b>[成績評価の方法]</b> 期末試験による。	<b>[参考文献]</b> 白畑知彦ほか著、「英語教育用語辞典」、大修館書店、1999。 ジョンソン・ジョンソン編（岡秀夫監訳）、「外国語教育学大辞典」大修館書店、1999。			
<b>[教科書]</b> なし				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会言語学 (旧 言語文化特講 (社会言語学))		通 期	4 単位	大原 始子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>日常、「ことば」は人間にとって空気のような存在であるため、その変化や使用の様子に注意を向けずにいることが多い。社会的要因と深く関わりながら、「ことば」は様々に姿を変えて存在し、日々変化している。また、話し手は、文化や社会の慣習にそって、「場面」や「相手」にふさわしい「ことば」を使い分ける。このように、言語の変種を、誰が、どこで、何を、どのように話すかに注目し、分析していく研究が社会言語学である。</p> <p>本講義では、前期は、多様な言語社会の形態を知ること重点を置き、学習していく。後期は、言語の多様性と語用論的研究を紹介しながら進めていく。専門的な内容に入るため、言語学、英語学の基礎知識があることが望ましい。社会学、文化人類学、社会心理学などと深く関わる学際的な学問領域なので、幅広い関心を持って、講義に取り組んでほしい。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>&lt;前期&gt;                      言語と方言                      国語、公用語、共通語、標準語                      「日本における第二公用語化」                      アメリカ、オーストラリア、アジア、アフリカの社会言語学的言語状況                      バイリンガルとダイグロシヤ                      ビジンとクレオール                      言語とアイデンティティ                      言語計画</p> <p>&lt;後期&gt;                      言語変種の地域差、世代差、男女差、階層差                      日本語アクセントの平板化                      ら抜き言葉                      協調の原理                      ポライトネス理論と敬意表現                      借用語</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>前期、後期終了時に、論述試験を行う。講義中に出すレポートの成績も評価に加える。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>その都度、プリントして配布、または指示する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>未定</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
音声学・音韻論 (旧 英語音声学)		秋学期集中	4 単位	南 條 健 助
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>この授業では、「音韻論は音声学の一部である」という英国学派音声学 (British School of Phonetics) の伝統に従い、主として英語音声学を概説することとし、その合間に音韻論の研究手法と最新の研究成果に関する基本的な知識を与える。</p> <p>英語音声学では、英国学派の実践音声学 (practical phonetics) に基づき、標準的なアメリカ英語の音声を、主として調音 (articulation) の面から科学的に研究する。実践音声学とは、自分の耳で聞いた聴覚印象や、自分で発音した際の音声器官 (vocal organs) の状態および筋肉運動を知覚するといった自己観察に基づいて、音声を記述・分析する音声学の研究手法の一つである。したがって、この授業では、まず第一に、英語の音声を正確に聞き取るとともに、聞き取った音声を、個々の母音・子音ばかりでなく、そのつながり方や強勢・リズム・音調にいたるまで、忠実に再現し、発音した際に、自分の舌や唇あるいは喉などが、どのような動きをしているかを感じ取ることができる能力を身に付けてもらう。授業では、そのための音声学訓練 (phonetic training) に、かなりの時間を割くことになる。また、そのような訓練と並行して、毎週少しずつ音声の理論と英語の音声事実を勉強していく。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>開講時に講義計画書を配布する。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>開講時に説明する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>講義中に紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>開講時に指示する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
異文化間コミュニケーション論		秋学期集中	4 単位	遠 山 淳
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>講義の内容は、異文化間コミュニケーションの諸現象およびそのメカニズムや、情報、文化、コミュニケーションの相関関係、言語とコミュニケーション、宗教とコミュニケーション、歴史とコミュニケーション、などについて講義し、文明と文化、普遍文化と個別文化との関係、異文化理解、文化変容、地球化時代の価値観・行動様式について考察する。また英語・日本語教員志望者に配慮し、英米人のコミュニケーション特性についても講義する。</p> <p>情報は文化を生成し、文化は人間に対して常に規範的に係わる。異文化理解も自文化からの自文化的な「理解」である。さて諸君はどこまで自文化を越えられるだろうか。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 異文化間コミュニケーション論とは</li> <li>2. 「文化」とは：静態と動態、定義、情報代謝理論</li> <li>3. 自文化中心主義と文化相対主義</li> <li>4. コミュニケーションの志向性と型、動因と文化型</li> <li>5. 言語と文化：エディックとイーミック</li> <li>6. 非言語コミュニケーション</li> <li>7. コミュニケーション能力と言語能力</li> <li>8. コミュニケーションの文化型：片立型文化と両立型文化</li> <li>9-10. コミュニケーションの比較：日本とアメリカ</li> <li>11. 「理解」法の文化比較：「わかる」こと、言行の一致と乖離</li> <li>12. 定量的方法と定性的方法、特徴と限界</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>期末に試験／レポートを課し、出席と合わせて総合的に評価する。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>遠山他著・石井橋本編『日本人のコミュニケーション』桐原書店、1993                  古田曉編・石井・久米他著『異文化コミュニケーション』有斐閣、1987                  祖父江孝男『文化人類学入門 増補改訂版』中公新書、1992</p> <p>遠山他編著『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣、2001</p> <p>他は授業中に紹介する。</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>遠山共編著『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、1998</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本文化論 (旧日本文化研究－文学)		秋学期集中	4 単位	深 澤 徹
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>ナショナリズムには様々な側面から論じられるが、そのもつともソフトな形態として「文化ナショナリズム」がある。近代社会においては、日本に限らず、文化を通してナショナリズムを喚起し、補強していくことがなされるのだ。本講義では、その「文化としての日本主義」について、様々な歴史過程のなかで、それが果たした役割について論ずる。</p> <p>扱う対象は主に戦後の日本社会で行われた「日本文化」についての様々な言説（いわゆる日本文化論）だが、前近代（江戸・中世・古代）へと適宜時代を遡らせて、世界でもまれに見る完璧な「国民国家」が創出されていく過程をたどることになるだろう。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 戦後日本の日本文化論の展開</li> <li>2. 日本における国民国家の創出過程</li> <li>3. 起源としての古代</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>2度行う試験の成績と、出席状況とを合わせて評価する。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>南博著『日本人論－明治から今日まで－』（岩波・1994）                  青木保『日本文化論の変容』（中央公論・1990）                  吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』（名大出版・1997）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>深沢徹著『自己言及テキストの系譜学』（森話社・2002）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語学概論		春学期集中	4単位	有川康二
<p><b>[講義概要・学習目標]</b> 日本語学習者の質問。「は」に濁点がつくと、「ば」。でも、何故「な」に濁点をつけて「な」にしても発音できないの？「大型」は「おおがた」。でも、何故「大風」は「おおがぜ」と言わないの？「病気の人」とは言うけど、何故「元気の人」とは言わないの？「猫が金魚を食べた」は変だけど、この時、頭の中ではどんなことが起こっているの？ 日本語話者なら誰でも日本語を自由に「使える」が、その仕組みを体系的に「説明」できない。（誰でも脳味噌は使えるが、そのメカニズムは説明できない。）「経験科学」の手法を用いてヒト脳言語野のメカニズムを探る。科学は、誰もが当たり前過ぎて考えるのも馬鹿らしいと思う事柄に驚嘆することから始まる。その意味では、「自然言語（ことばをしゃべる）」は「重力（ものが落ちる）」や「光（明るい・暗い）」とともに科学の格好の対象である。 日本語を三つの視点から概論する。（1）生物言語学の視点＝自然が創り上げた脳の創発的自己組織化の過程で出現した自然言語の一般的性質とは何か？（2）日本語教育学の視点＝日本語を外国語として学ぶ人々にとって日本語の客観的な説明とは何か？（3）哲学的視点＝私とは何者なのか？私はこの宇宙の中で何をしながら死を待っているのか？（こんなことは大学とお寺でしか言われないので我慢してください。）</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>音特徴情報処理のインターフェースにおける原理とメカニズム（簡単に言えば「音」の問題）</li> <li>文全体の意味特徴情報処理のインターフェースに至る過程から音特徴が剥ぎ取られた後、音特徴情報処理インターフェースに至る早い段階における原理とメカニズム（簡単に言えば「単語」の問題）</li> <li>文全体の意味特徴情報処理のインターフェースに至るまでの構造形成の過程における原理とメカニズム（簡単に言えば「文」の問題）</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b> 出席・筆記試験</p>	<p><b>[参考文献]</b> 井上和子・原田かつ子・阿部泰明『生成言語学入門』大修館書店</p>			
<p><b>[教科書]</b> 上山あゆみ『はじめての人の言語学—ことばの世界へ』（くろしお出版）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語文法論（旧 日本語文法・文体論）		春学期集中	4単位	有川康二
<p><b>[講義概要・学習目標]</b> ここでは、ヒト脳の自然言語計算処理過程に関わる3つの特徴（音特徴、意味特徴、構造特徴）のうち、意味特徴と構造特徴に焦点をあてて議論する。日本語の母語話者の文法性反応を使用して思考実験を行う。ヒト脳という複雑系において出現した自然言語における構造とは何か？ヒトの幼児がどの言語でも努力なしに獲得できるのは何故か？一致現象は英語にはあるが、日本語にはないと言われるが、本当か？一致現象とは何か？日本語には主語はないと言われるが、本当か？主語とは何か？「は」と「が」の違いは何か？「昨日、御飯、食べた？」に対する否定の答えは「いや、食べなかった」だが、「もう御飯、食べた？」に対しては「いや、まだ食べなかった」は変だ。「まだ食べていない」である。何故か？「猫が金魚を食べた」と「金魚が猫に食べられた」は何がどう違うのか？「私は猫に金魚を食べられた」と何がどう違うのか？これらの文は、頭の中でどのように形成され、解釈されているのか？英語の疑問詞は文頭に動き（What did Mary buy?）、日本語では動かない（花子は何を買ったの？）と言われるが、本当か？自然が創造したヒト脳に関わる自然法則や計算処理のメカニズムを、日本語という自然言語の観察を通して吟味する。日本語学概論、英語統語論、言語習得論、数学、生物学、自然科学関連の講義も受講することが望ましい。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>日本語のきまりと仕組み 文の構成要素とその種類分け 「こと」の類型（述語の種類とその補語との結びつき） 「主語」「主格」「主題」 述語の活用 テンス・アスペクト 態（ヴォイス一格と動詞の形との相関） 心的態度（ムード）の表現</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b> 出席・筆記試験</p>	<p><b>[参考文献]</b> 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味I』（くろしお出版） 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味II』（くろしお出版） 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味III』（くろしお出版）</p>			
<p><b>[教科書]</b> 寺村秀夫『日本語の文法（上）』（国立国語研究所） 寺村秀夫『日本語の文法（下）』（国立国語研究所）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
語彙・意味論		春学期	2 単位	藤 原 健
<b>【講義概要・学習目標】</b> ことばによる表現が、単語を一定の文法規則に従って文の形にまとめ上げることであるとするれば、表現にはいくつかの単語が使われていると考えるのが普通であろう。私たちが使っている日本語も、数多くの単語を意味伝達的手段として、それを文や文章、談話の形にまとめ上げているのである。「語彙」とは、このような文章や談話を形成するための要素として用いられる単語の集まりのことであり、言語にとって文法と同等に重要な要素である。 この講義では、日常的な平易な用例をもとに、日本語の語彙の意味や構成を分類し、普段使っている日本語の語彙について、いろいろな面から考えてみたい。	<b>【講義計画】</b> 1. 単語と語彙 1) 単語とは 2) 語彙とは 3) 語形 2. 語の数 1) 基礎語彙と基本語彙 2) 使用語彙と理解語彙 3) 語数とカバー率 3. 語の種類（語種） 4. 語構成と造語法 1) 語の構成成分 2) 造語法 3) 造語に伴う音声変化 5. 語の意味 6. 構文・文型における語彙 7. 文章と談話における語彙			
<b>【成績評価の方法】</b> 定期試験（半期科目であるので、春学期1回）により評価する。 くわしくは、授業初回に説明する。	<b>【参考文献】</b> 浅野百合子（著）『教師用日本語教育ハンドブック⑥語彙』（国際交流基金／凡人社）			
<b>【教科書】</b> 森田良行・村木新次郎・相沢正夫（編）『ケーススタディ・日本語の語彙』（おうふう）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
文字・表記論		秋学期	2 単位	藤 原 健
<b>【講義概要・学習目標】</b> 言語は、音声媒体とした音声言語と、文字媒体とした文字言語とに大別できる。この講義では、これらのうち後者の媒体となっている文字について、日本語の場合はどうなっているのか、内閣告示された基準をもとに考えていく。日本語の表記に用いられる文字は数も種類も多く、また使いかたが複雑である。例えば、平仮名ひとつとっても、「こんにちわ／こんにちは」「そのとうり／そのとおり」「ぬのじ／ぬのち」のどちらの表記が正しいか、自信を持って言えるだろうか。 外国人の日本語学習者にとって、日本語の文字・表記は習得が大変で、ネックになることが多い。この講義では、日本語教育の立場から、実践の場で教師に求められる文字・表記に関する知識と、指導する際に注意しなければならない点などを考えていきたい。	<b>【講義計画】</b> 1. 日本語の表記法と基準 1) 漢字の表記法（「常用漢字表」） 2) 平仮名の表記法（「現代仮名遣い」） 3) 片仮名の表記法（「外来語の表記」） 4) 送り仮名の付け形 5) ローマ字の種類と表記法 2. 文字に関する知識 1) 漢字（の成り立ち） （六書、部首、画数、字形等） 2) 仮名（の成り立ち） （真名、平仮名、片仮名等）			
<b>【成績評価の方法】</b> 定期試験（半期科目であるので、秋学期1回）により評価する。 詳しくは、授業初回に説明する。	<b>【参考文献】</b>			
<b>【教科書】</b> 富田隆行・眞田和子（共著）『教師用日本語教育ハンドブック②新・表記』（国際交流基金／凡人社）				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語教授法 I		春学期集中	4 単位	有川康二
<p><b>[講義概要・学習目標]</b>                      どんな教授法（教え方の哲学や方法）、どんな教科書にも長所と短所がある。要は、様々な教授法や教科書の長所をなるべく多く利用することである。ここでは、日本語の初級文法に焦点を絞り、（教師にとっての）実践的な文法整理と、（学習者にとって）効果的なドリルの紹介やシミュレーションを行う。                      一定の制限された状況（＝教室内）や時間内（初級の集中コースとして例えば週15時間の約6か月）に、日本語を母語としない人に日本語文法全体の基礎的な体系を順序よく説得的に説明し、効果的に練習を行い、「使える日本語」を身につけてもらうためには、教える側に特別な知識と技術が必要となる。何語でもそうだが、ある言葉が話せることと、その言葉を外国語として他者に体系的、説得的に教えることができる能力とは別物である。同時に、「何故、自分は外国語を学ぶのか？何故、自分は日本語を外国語として教えるのか？」という問いを問い続けなくてはならない。</p>		<p><b>[講義計画]</b>                      指示表現（こそあと）                      形容詞                      存在表現                      時制（テンス）                      保留形（テ形）                      願望の助動詞ta/gar                      可能の助動詞e/rare                      様態・推量の助動詞soo/yooda/rasii                      テイル・テアル・テオク（窓が開いている・開けてある・窓を開けておく）                      授受表現（やる・あげる・もらう）                      態（受身・使役・使役受身）                      条件表現（雨が降ったら・降るなら・降れば・降ると）                      敬語（お読みになる・お読みする・なさる・いたす）</p>		
<p><b>[成績評価の方法]</b>                      出席・筆記試験</p>		<p><b>[参考文献]</b>                      三浦昭『初級ドリルの作り方』（凡人社）</p>		
<p><b>[教科書]</b>                      東京YMCA日本語学校（編）『入門日本語教授法』（創拓社）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語教授法 II（旧 日本語教授法 II（2））		通 期	4 単位	友 沢 昭 江
<p><b>[講義概要・学習目標]</b>                      日本語学習者の多様化によって、多くの教材が開発されています。実際の教育に携わる者は、学習者の学習目標や言語背景を考慮に入れ、最も効果的な成果をあげるために最適な教材を選択する眼を持たなければなりません。さらには、市販の教科書や教材ではまかないきれない部分を補充するための自主作成教材を臨機応変に作成する能力も必要とされます。本講では具体的な教授項目を示しながら、それに適した教科書や教材にどのようなものがあるかを紹介し、その特徴の分析を行います。</p>		<p><b>[講義計画]</b>                      初級の教え方（発音/会話）                      初級の教え方（文字/読解）                      中上級の教え方（会話/聴解）                      中上級の教え方（読解/情報収集）                      評価と試験                      いろいろな外国語教授法</p>		
<p><b>[成績評価の方法]</b>                      学年末に試験を行います。それ以外にも授業への参加の姿勢、与えられた課題にしたがってのレポート作成、および出席状況を総合的に考慮して評価を行います。</p>		<p><b>[参考文献]</b>                      『はじめての日本語教育1：日本語教育の基礎知識』（高見澤孟、アスク）                      『初級ドリルの作り方』（三浦昭、凡人社）                      『教え方の基本』（日本語教育演習シリーズ⑥、丸山敬介、凡人社）                      『日本語教師をめざす人の日本語教授法入門』（石橋玲子、凡人社）                      『概説日本語教育』（遠藤織枝編、三修社）</p>		
<p><b>[教科書]</b>                      『はじめての日本語教育2：日本語教育入門』（高見澤孟）（アスク、1996）</p>				



「英語 I A」 使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
01 〈春〉	野原 康弘	〈スポーツ推薦クラス〉			
11 〈春〉	伊藤 貞基	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	L. A. Hill	<i>Amusing Stories for Comprehension</i>	英潮新社
12 〈春〉	大橋 範子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		プリント配布	
13 〈春〉	川上 与志夫	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		新学期が始まってから 様子をみて決定します	
14 〈春〉	川上 与志夫	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		新学期が始まってから 様子をみて決定します	
15 〈春〉	葛原 香代子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		第一回目の授業で指示する	
16 〈春〉	前田 淑江	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	中村眞佐男・前田英樹 Jason Moser	<i>Gateway to International Communication</i>	大阪教育図書
21 〈秋〉	大橋 範子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		プリント配布	
22 〈秋〉	川上 与志夫	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		新学期が始まってから 様子をみて決定します	
23 〈秋〉	葛原 香代子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		第一回目の授業で指示する	
24 〈秋〉	橋本 昇	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	Osamu Yamaguchi Tim Guire	<i>Listening Pointer for the TOEIC Test</i>	成美堂
31 〈春〉	上田 洋子	経済	Connie Shoemaker 他	<i>Real Stories in the News</i>	成美堂
32 〈春〉	後藤 正次	経済	後藤正次	<i>The Introductory Studies of Current English (1)</i>	山口書店
33 〈春〉	本山 晶子	経済		第一回目の授業で指示する	
34 〈春〉	上田 洋子	経済	Connie Shoemaker 他	<i>Real Stories in the News</i>	成美堂

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
35 〈春〉	後藤正次	経済	後藤正次	<i>The Introductory Studies of Current English (2)</i>	山口書店
36 〈春〉	本山晶子	経済		第一回目の授業で指示する	
37 〈春〉	山本路恵	経済	三浦笙子 他	<i>Say It Aloud</i> 『基礎からのクイック・リスpons』	三修社
38 〈春〉	吉田一穂	経済	柴田バネッサ Robert West	<i>Reading Tactics for the TOEIC Test</i> (TOEICテストのためのソーディング戦略)	南雲堂
39 〈春〉	杉田トモ子	経済		プリント教材使用	
40 〈春〉	横町治子	経済	川上省三	ポキャブラリー養成ミニ講座 基礎から増やす必須英単語	金星堂
51 〈春〉	荒山初子	社会		第一回目の授業で指示する	
52 〈春〉	大川愛子	社会	Samuela Eckstut	<i>Communication in the Real World</i>	成美堂
53 〈春〉	木村博是	社会	T. O'Brien	<i>Bridge to College English</i>	南雲堂
54 〈春〉	釣井千恵	社会	沖野泰子・南條健助 森岡裕一・山科美和子 横山三鶴	ミュージック オブ ハート	英宝社
55 〈春〉	荒山初子	社会		第一回目の授業で指示する	
56 〈春〉	堀内真由美	社会	JACET関西支部 リスニング研究会	英語のリスニングストラテジー ーコミュニケーションのための 実践演習ー	金星堂
57 〈春〉	和栗了	社会	Norma Reveler Hiromi Nema	『マスメディアは語る』	英宝社
61 〈春〉	木村ゆみ	社会福祉	木村ゆみ	知っておきたい英語表現	開文社
62 〈春〉	佐々木英哲	社会福祉	石井隆之・中川 昭 Thomas Koch	ストーリーで学ぶ TOEICテスト2	三修社

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
63 〈春〉	都築郷実	社会福祉	田本健一 Simon Sandra	基本英語表現法	成美堂
71 〈春〉	野原康弘	経営		<i>English Here &amp; Now IA</i>	
72 〈春〉	Alan Greenhalgh	経営	The Team Jack C. Richards	<i>English Here and Now at Momoyama 2002(IA +IB) New Interchange (with CD)</i>	Cambridge U. Press
73 〈春〉	三宅 亨	経営		使用しない (共通テキストのみ)	
74 〈春〉	横町治子	経営	川上省三	ボキャブラリー養成ミニ講座 基礎から増やす必須英単語	金星堂
75 〈春〉	大井映史	経営	編著者：竹前文夫 菊地圭子	<i>Read and Practice Basic English: Grammar Practice in Context</i>	成美堂
76 〈春〉	Alan Greenhalgh	経営	The Team Jack C. Richards	<i>English Here and Now at Momoyama 2002(IA +IB) New Interchange (with CD)</i>	Cambridge U. Press
77 〈春〉	辻井悦子	経営	Connie Shoemaker Susan Polycarpou Kazuya Asakawa Seichi Fukui	<i>Real Stories in the News</i>	成美堂
78 〈春〉	遠山 淳	経営		プリントを使用する。	
81 〈春〉	大石正晴	法学	Christofer Bullsmith 他	<i>COMMUNICATION NOW</i>	南雲堂
82 〈春〉	岡田章子	法学	Edwin Way Teale	<i>Wandering through Winter</i>	松柏社
83 〈春〉	清水真一	法学	桃沢力	場面とジャンルで考える英作文	金星堂
84 〈春〉	中村祥子	法学	Atsushi Mukuhira 他 共編	<i>Curing the Future - Current Topics of Health</i>	成美堂
85 〈春〉	橋内 武	法学	Kazuyo Murata & Mami Otani	<i>English Composition Workbook</i>	Macmillan Language House
86 〈春〉	藤森 かよ子	法学	Richard Powell	<i>Viewpoints in Law</i>	Macmillan Language House

「英語ⅡA」使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
01 〈秋〉	野原 康弘	〈スポーツ推薦クラス〉			
11 〈春〉	坂本 姫子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	吉田研作	起きてから寝るまで表現550 日常生活編 (CD付) \¥1,480	アルク
12 〈春〉	林 宅男	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	(編注者) 柳浦恭	<i>The Contemporary Reader An Introduction to Reading Comprehension</i>	Macmillan Language House
13 〈春〉	伊藤 貞基	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	Donald Sobol	<i>Two-Minute Mysteries</i>	Macmillan Language House
14 〈春〉	金城 盛紀	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	James House 編	<i>The Carpenters 22 Hits</i>	成美堂
21 〈秋〉	葛原 香代子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		第一回目の授業で指示する	
22 〈秋〉	川上 与志夫	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉		新学期が始まってから 様子を見て決定します	
23 〈秋〉	上田 洋子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	Gillian Flaherty 他	<i>Which side are you on ?</i> 英語で考え、話す社会問題	成美堂
31 〈秋〉	上田 洋子	経 済	Connie Shoemaker 他	<i>Real Stories in the News</i>	成美堂
32 〈秋〉	後藤 正次	経 済	後藤正次	<i>The Historical Development of the English Language</i>	白鳳出版
33 〈秋〉	本山 晶子	経 済		第一回目の授業で指示する	
34 〈秋〉	上田 洋子	経 済	Connie Shoemaker 他	<i>Real Stories in the News</i>	成美堂
35 〈秋〉	後藤 正次	経 済	後藤正次	<i>The Historical Development of the English Language</i>	白鳳出版
36 〈秋〉	本山 晶子	経 済		第一回目の授業で指示する	
37 〈秋〉	山本 路恵	経 済	三浦笙子 他	<i>Say It Aloud</i> 『基礎からのクイック・リスポンズ』	三修社